

俳句雜誌

水明

2022 11月号

令和四年十一月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十五卷第十一号



《今月のかな女》

時雨るるや又少しのむ熱さまし

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

時雨の季節が到来して、今日は朝から陰鬱な茶の間である。油断して風邪を引いてしまったようで、微熱があり身体が氣怠い。先刻、掛かり付けの医院で貰ってきた解熱用のみぐすりを飲み足して横になる。水薬と解したのは、「又少しのむ」から想像したものであるが、現今であれば、「もう一錠」というところか。時代性が表れていて面白い。筆者の幼少の頃も水薬であった。

(鬼之介・註)

— 華の一句 —

たつた一駅武蔵野線の秋の旅

菅原真理

正確に言うと、武蔵野線は、神奈川県
横濱市の鶴見駅から千葉県の船橋市
の西船橋駅を結ぶJR東日本の鉄道路
線であるが、鶴見と府中本町の間は、
貨物のみの運行なので、一般的には、
府中本町から西船橋の路線とみなし
てよからう。武蔵野台地や見沼田圃
そして、各所に展開する田園風景を
楽しむには持って来いの路線である。
Suicaを使つての一駅の旅気分を味
わつた秋のひと日であった。
(鬼之介・推薦)

水明

令和4年
11月号

今月のかな女

華の一句

姫の買物(作品)

白萩(近詠)

冬の七菜(近詠)

冠木門 主宰作品の鑑賞

硯箱 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

山本鬼之介

矢作水尾

網野月を

境延昭

井口俊晴

五明昇境
延昭
椎野美代子
ほか

梅澤佐江
池田雅夫
松井由紀子
ほか

河野はるみ
石田慶子
日高道を
ほか

黒岩徳将

網野月を



集	俳句と私	32
特	自選五十句	34
家	男盛り	38
野	命	40
作	月をの一句	42
網	新季音同人(わたしの近詠二句)	46
野	網野月を	32
家	原雅子	38
野	永野史代	40

水明集

阿部幸代 梅澤輝翠
 洪谷さいち ほか

水	水明集作品評	49
琴	山紫窟(水明集九月号鑑賞)	60
山	山紫集	68
鼓	鼓笛集(同人作品)・私の一句	74
俳	俳誌望見	66
句	句集喝采	67
水	水明の記事他誌転載	78
り	りんどう忌の記	80
水	水明例会報・各地句会報	82
新	新珠賞作品募集のお知らせ・新春俳句大会のご案内	90
風	風声・発展基金御礼	92
後	後記	94
青	青木鶴城	80
梅	梅澤佐江	66
近	近藤徹平	67

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

姫の買物

山本鬼之介

兄妹のやうに語るや思ひ草

月明や庭に素面の老剣士

枝折戸にかしづくかたち秋の草

秋澄むや日脚のとどく勅使の間
ネクタイの売場ひやかす龍田姫
菊の日や夕陽ゐすわる長廊下
今日は八瀬あすは明日香の草紅葉
眼の端に浅瀬を渡る穴まどひ

白萩

矢作水尾

玻
璃
拭
き
て
一
氣
に
秋
を
極
め
け
り

爽
や
か
や
厨
に
並
ぶ
皿
小
鉢

秋
茄
子
の
紺
き
つ
ぱ
り
と
水
は
じ
く

白
萩
の
こ
ぼ
る
る
庭
の
薄
明
り

白
粉
花
や
風
の
行
く
手
の
夕
日
影

わ
が
影
の
上
に
影
あ
る
木
々
九
月

雲
の
色
風
の
音
に
も
秋
立
ち
ぬ

九月十日は「中秋の名月」。月を見に庭に出ると、芝生の上に青柿が三個落ちていた。
昔この家に嫁いだ頃、庭には柿の木が五本あった。考に聞くと「時季をずらして長く食べられる様に五種類植えた」と言う。なるほどと感心した。その後家を建替た。そして五本の柿の木に代わり亡夫と植えた一本の柿の木のみになった。今年も台風にあわず柿が熟れる様にと願っている。

冬の七菜

網野月を

変なのと言はれ続けて姫キャベツ
白菜や痴呆の母は刈上げに
大根や飽きて豆腐の鼻肩なる
ポパイには負けたくないぞ小松菜を
半分半分半分にして葱は白
先づ切つて茹でるJKはうれん草
春菊や綺麗に避ける老紳士

人の力は小さくて大きい。他の種を滅ぼすとき人の力は大きい。善を行うとき人の力は小さい。父親の悪い癖を息子は受け継ぎ、母親の長所を娘は引き継ぐ。尊敬した師からは不都合なところを受け継ぎ、反面教師の師からは青藍の器もあるよし。私事であるが、九月十二日に父が亡くなった。享年九十六歳であった。どうやら悪い癖はすべて受け継いだようである。以上、七句は父を看取りながら作句した。

冠木門

● 主宰作品の鑑賞

境延昭

八月号

車夫憩ふ目抜き通りの夏柳

懐かしさが胸を突く。しかし、既視感はあるのだがその場所を確と特定できない。車夫と言えば浅草だが雷門通りの柳は数年前に刈られ既がない。吉原には今も「見返り柳」が残されているのだが……。タイトル「昭和の音」の巻首に座る句、新橋や赤坂の昭和の花柳街の景の様に読ませてしまう。

背負ふチェロ口担ぐカンバス緑陰を

チェロはピオラとコントラバスの間の四弦の大型楽器、男前で名演奏家ロストロポーヴィチ以降女性の奏者が増えた。両脚の間に立てて弓で弾く様が艶っぽい。

女性奏者が増えたためか、ランドセルの様に両肩で背負う楽器ケースを目にするようになった。チェロとカンバスの对比のさせ方が作者らしく独特で面白い。

打水もさすが「一力」申の刻

「一力」は花街の京都祇園で最も格式のあるお茶屋である。元の屋号は万亭であったが歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」に「一

力」の名で登場、芝居の成功に肖って茶屋の名を変えた。今も祇園甲部の中心的存在である。申の刻は午後四時、一度は客として訪ねたい佇まいである。

天井に唸る昭和の扇風機

今月のタイトル「昭和の音」はこの句に因る。昭和のころの古い扇風機が天井にある景と読むのが素直だが、昭和の東京オリンピックの頃の三笠会館などを思い出してしまう。

元号を詠み込むには勇気が要る。殊に「昭和」には戦前と戦後、戦後であっても敗戦の混乱期と高度成長期以降とは全く違う時代性を纏う。同じ元号でも平成や令和では句にならない。皇位継承があった場合政令で決めるのが元号、厄介な話ではある。

炎昼に訳の判らぬ人の列

蟻ほどではないとしても人は列を作りたがる。日本人の習性ですら思える。空港のカウンターに整列するのは日本人、割り込んでくるのは中国人か韓国人だ。

句は街で目にする何気ない景だが本当に訳が判らない。これは心理学や今はやりの「行動経済学」の領域に関わって解

明されるべき行為かもしれない。

九月号

折鶴の羽に入魂秋立つ日

折鶴には祈りが込められる。六年前のG7サミット日本開催の折に当時現職の米国大統領のオバマ氏が広島を訪問した。原爆死没者慰霊碑に献花、自ら折ったという折鶴二羽を献じる場面があった。季節は初夏だったが句を一読してその時のことが蘇った。大国を背負う政治的パフォーマンスではない、生身の人としてシンパシーを覚えたものだった。

初に見る隣家の佳人むくげ垣

隣家の佳人にあれこれ詮索したくなる。勿論女性、佳人の表現には成人間もない若さでなくそれなりの世事に通じた年高を想像する。最近お隣に越してきた人には違いない。晩婚化の昨今、お嫁さんかも知れない。下五に垣の字があるせいか隣家との距離を感じてしまう。

少将といへば「深草」秋螢

「通ひ人」と言えば小野小町の許に九十九夜通った深草少将を措いて他にない。室町時代の能作者の創作であるが京都伏見区の欣浄寺に屋敷があったと伝わる。小野小町に百夜通えば妻になると言われ、百日目の夜の大雪に凍死した。山科

には少将の恋文を埋めたという文塚が遺る。小野小町は平安前期の歌人、数百年を経た室町時代の演目が更に数世紀後の今も語り継がれる。これこそ長大なロマン、京の魅力である。千年余の言わば伝説を踏まえて今現実のものは季語「秋螢」のみである。他人には真似の出来ない作者独特の句の構成であり俳句の技法である。

地方紙にくるまれましたるラ・フランス

ラ・フランスと言えば西洋梨の一種で山形が主要産地、地方紙も自ずとその名に察しが付く。色と特にその形がいびつで不揃い、「果実の女王」の名にそぐわぬ外観である。樹上で熟することはなく、収穫後の追熟によって芳醇な香りと上品な味と食感がでる。品種の移入は明治早々だが高級果実としての普及は比較的新しい。その間追熟技術の開発の苦労があったようである。

名苑の殿方用やつくつくし

殿方用とは男の小便便器である。よくぞ俳句にと思ふ。昔その形から「朝顔」と呼んだが今は殆ど縦に長い長方形。軽犯罪法に触れる行為ではあるが、幼児の飛ばしっこをはじめ若人の立小便には夢がある。名苑にもトレイは必須、隅っこにあっても目の高さに横長の窓がある。家庭に椅子型の洋式トイレが普及、学校でも個室トイレでしか用を足せない男児が増えたという。横並びして知る未来もある筈である。

硯箱

◆季音九月

井口俊晴

渾身の蟬声弾く力石 十倉和子

真夏の神社の境内、額に流れる汗を拭きふき本殿に向かつて進むと、道の脇に一抱えもある大石がデンと据えてある。五六十キはあるうか、江戸時代には力自慢の男衆が抱え上げたとか。世に言う力石である。その力石の上に、夏の盛りを惜しむように力一杯、声を限りに鳴く蟬の声が降り注ぐ。だが、その渾身の声も、硬く光った岩肌には弾き返され、虚しく辺りに響くだけだ。

もう逢へぬ友幾たりか沙羅の花 波多野寿子

夕暮れに沙羅の花が一つ、また一つと散っていく。花芯部が黄色、花びらが白のコントラストが椿そっくりで、夏椿とも呼ばれる。たった一日で散ってしまう「一日花」なので、儂さの象徴のように言われる。地面に落ちた花を見るにつけ、亡くなった友人を指折り数え、思い出に耽る。さて、入滅さ

れたお釈迦様の傍に生えていた沙羅双樹だが、熱帯性なので日本では育ちにくいそうだ。だから「平家物語」の沙羅双樹とは、こちらの沙羅で夏椿のことらしい。

試飲せりポップな意匠の缶ビール 柚木治子

スーパーに行くと、実にいろんなビールを売っている。テレビCMでお馴染みの大手メーカーの缶ビールがほとんどだ。赤だの、青だの色々あるが、飲んだことはなくても、見慣れたものばかり。でも、きょうの作者はちよつと違った。「ポップな意匠」の缶だったのだ。普段とは違う、あまり見かけないデザインだった。そうした魅力に弱い作者は、つい試飲までしてしまったと言う。でも、その気持ち分かるなあ。私も「水曜日ネコ」という、水色の下地に、それはポップな猫の姿を描いた缶ビールのファンだったからです。

夾竹桃燃ゆ渋滞の高速道 内田恵子

暑い。エアコンをかけていても、車の外では熱風が吹き、渋滞真つ只中の高速道はアスファルトが溶けてしまいそう。片側三車線の両側には真つ赤な夾竹桃が咲き誇り、それが余計に暑さを感じさせる。なんでも夾竹桃の葉の裏側は小さく窪んでいて、内側に毛が生えている部分があり、それが排気ガスなどの有害物質を防ぐフィルターの役目をしている。このため、公害にもやたら強く、街路樹や工場の緑化のため植えられるのだそうだ。

打水やはるかに聞こゆこんちきちん

大場順子

京都の暑さには定評がある。そこで、少しでも暑さを和らげようと、家の前の道に打ち水をする。バケツと柄杓を使って、あるいはホースで一気に。気温は変わらなくても、体感温度は一・五度ほど涼しくなると言われている。風に乗って、遠くの方からコンチキチンと祇園祭のお囃子が聞こえてくる。日が暮れるまであとちよつとだ。

むくむくと身を振じる八月の雲

池田雅夫

八月の蒼天に浮かぶ一朵の白い雲、司馬遼太郎の名作「坂の上の雲」そのものではないか。氣象予報士によると、高気圧に覆われた八月は気温がぐんぐん上がり、一方でじめじめ

と湿気が高いため、むくむくして身を振るような入道雲が発生するのだとか。名作に登場する主人公の一人、正岡子規も大志を抱き、白い雲を眺めたことだろう。

炎帝を乗せ軽トラの唸り声

正木萬蝶

真夏の直射日光を浴び、灼けるように熱くなった軽トラックの荷台。きつと夏の神様が乗っているに違いない。積んでいる荷物は大きな段ボール箱。どうやら猛暑に悲鳴を上げ、新婚家庭が購入したエアコンのようだ。早く届けて上げなければ。おっと、どこかに出かけていたドライバーが戻って来て、慌ててエンジンをかけた。軽トラックはすぐガタガタ身震いして唸りを上げ始めた。

ペン立てに頭でつかちなる団扇

石川理恵

昼下がりのリビングのテーブル。読みかけの新聞と一緒に、隅っこに可愛いペン立てが置いてある。普段はボールペンとかハサミとかが差してあるのだが、きょうは団扇が差し込んでいる。これは正直なところ、ちよつと違和感がある。だって団扇の頭と呼ぶべきなのか、煽いで風を送る面はペン立てに比べてかなり頭でつかちで、ひよつとしたらペン立てごとひっくり返ってしまいかねないからだ。

季
音
雪



風 信 帖 五 明 昇

瀬を過り残暑へ戻る舟下り
涼新た木曾の五木を渡る風
秋の雲「風信帖」の筆遣ひ
詩の工夫生まるるまでの秋扇
水争ひの謂れの堰や赤まんなま

日本国憲法 境 延 昭

立漕ぎの抜きつ抜かれつ鱚雲
醉漢二人袋小路の長き夜
「日本国憲法」爽秋の蔵書印
秋すだれ今更出来ぬ隠しごと
鱚雲幡立ててゆく野辺送り

秋 果 椎野美代子

降り立てば幸水豊水水の里

胸乳より重たきシャインマスカット

マダムと呼び止めらるるラ・フランス

白桃や一糸まとはぬヴィーナス像

その娘二十蜜の重さの水蜜桃

登 高 鈴木康世

卒寿今を謝して高きに登りけり

登高の道連れ夫の写真なる

捨てられぬ夢一つ持ち登高す

登高や彼方に全容富士坐る

気負はずに高きに登り乾杯す

赤 蜻 蛉 島津初花

十 六 夜 田寺玲子

二・三匹産着を揺らす赤蜻蛉

木犀の香に送られて児を産みに

あの家も人棲まぬ家柿撓

運休の放送しきり萩の雨

長寿眉立派に残し喪の秋思

ひそやかに名水を汲む十六夜

秋高し明石大門を巡視船

昼網の秋鱧でんと魚の棚

実石榴を窓辺に居留地煉瓦館

赤とんぼひしほの町を群れにけり

十六夜 十倉和子

秋彼岸 西山貴美子

月の出を高石垣に集ひ待つ
弦締めて十六夜の月待つばかり
十六夜のリハビリのチェロ一途なる
刃物研ぐ顔は山姥虫すだく
秋風と同席水上レストラン

送電線のかすかな揺れや暮の秋
父母も爺婆もゐらず秋彼岸
前菜の彩りほのと秋彼岸
ズームアップして紫蘇の実の点々と
手弱女の膝に候るのこづち

多産 永野史代

コスモス 波多野寿子

内耳まで届く敗戦日の蟬
新涼や喉ひやりと薄荷糖
酒蔵に麴の匂ふ雁渡し
雁渡し海辺に焚きし父母のもの
鶏頭の種をこぼして多産かな

子等の声遠くに聞えコスモス野
家元の文字に見入るや涼新た
水澄むや漆黒の城天に映ゆ
琴唄は「卒塔婆小町」秋の蝶
針箱に残る待針つづれさせ

女 三 人 星野和葉

足早の家路こほろぎ頻りなり
門限など忘れてしまへ虫時雨
女三人今宵は静か虫の宿
悠悠と機影羽田へ野分中
キャンセルの旅程を追うて野分後

百 の 彩 茂木和子

葉 鶏 頭 夢 の 合 間 の 鳥 の 声
葉 鶏 頭 雨 百 彩 の 色 零 す
筆 筒 に 父 の 絵 筆 や 野 鶏 頭
鶏 頭 や 直 立 し て る 首 疲 れ
鶏 頭 の 背 中 む せ び 泣 く 容かたち

夕 月 夜 矢作水尾

山並は眉引くごとし夕月夜
黒黒と切り立つ古城夕月夜
新涼や仕立おろしの藍紬
米をとぐ音が宵闇連れてくる
新涼や勢ひづきし筆の先

秋 扇 山中みどり

此処だけの話秋扇閉ぢ開き
柿渋の秋扇平蔵とすれ違ふ
唐 棧 の 袋 に 納 む 秋 扇
墨 堤 へ 石 の 近 道 曼 珠 沙 華
労りて障子に代へる葭戸かな

つぶやく 柚木治子

立待月 網野月を

天高し青一色の無限大
もろこしや耳まで裂くる食べつぷり
茹でたての平和の色や玉蜀黍
梯子して秋蝶蜜を吸ふ虚空
一瞬の俳句に似たり流れ星

天高し胃瘻のすすめ断りて
砂時計をひとまづ横に良夜なる
欠くればやいとし盛りの十六夜
虫の闇耳を澄ませば神の声
彼岸花地球の中の朱を纂む

寝そびれて 由良 ゆら女

秋模様 石井喜恵

かなかなや母の体内出でし刻
子規の顔いつも横向きラ・フランス
音もなく螺旋階段梨を剥く
鬼皮とやつと渋皮栗の虫
寝そびれて一盞欲しき秋の蛇

背に風沖に白波秋立つ日
秋蟬や流木で書く砂の文字
山荘に残る揺り椅子秋簾
蛸や無人の駅の時刻表
曼陀羅の朱の色重き鶏頭花

秋の空 石山かつ子

野の草を大壺に活く民芸館
茸狩支流に添ひし獣径
台風来足場の補強急がねば
熱爛を受けてかへして真砂女の句
異文化の老いて二人や秋の空

月の庭 大橋 廸代

「ことり」朝刊この秋の雷搔いくぐり
いりあひの鐘や稲穂の香りたつ
虫喰ひの西行坐像いなびかり
いぎよひの見返り弥陀に呼ばれたり
大の字の貉むじなとしばし月の庭

長き夜 大村節代

息きらし登る山道吾亦紅
この道は来世への道吾亦紅
丁寧ていねいに開く赤本夜長し
宵闇や脱ぎし着物を袖畳み
長き夜や言葉少なき人と居り

秋色 小倉 倭子

事典繰る指の触感秋立てり
重厚な句集「マネキン」秋ともし
支へ合ふ「人」といふ文字秋の展
秋づくや亡き人偲ぶ花図鑑
雑草と言ふ草はなし秋の草

九十九髪 栢尾 さく子

ミシガンへハワイへ八月の夜のメール
異国語を学ぶ八月の九っも九も髪
十六夜の愁ひ呼び込む肘枕
名月へつづく石段一歩づつ
散りやすき新聞の文字くつわ虫

胡 桃 菊池 ひろこ

胡桃生る一角古び男子寮
まだ老けぬ覚悟の両手鬼胡桃
歌ふのも歩きの一つ秋の山
鬼灯市女社長の歩で抜くる
前世の記憶ありあり花野道

第23回「俳句四季」全国俳句大会 俳句作品大募集

「俳句四季」では全国俳句大会を開催し、俳句作品を公募しています。力作をお待ちしています。

◆募集

二句一組（雑詠・未発表のもの）何組でも可

◆投句方法

「俳句四季」巻末の投句用紙または原稿用紙に
作品・住所・氏名・電話番号を明記

◆投句料

一組につき一〇〇〇円（現金書留・小為替・郵便振替
（振替）〇〇三〇〇一〇五七二八三九

◆締切

二〇二三年二月一日（消印有効）

◆送り先

〒189-0013 東京都東村山市栄町二二二二二八
東京四季出版「全国俳句大会」係
電話 〇四二一三九九一二八〇

◆大賞 一名 賞状・記念品・副賞二〇万円

優秀賞 二名 賞状・記念品・副賞五万円

佳作 六名 賞状・記念品・副賞一万円

◆浅井慎平・夏井いつき・富士真奈美賞 各一名

◆予選発表「俳句四季」五月号

◆入選発表「俳句四季」七月号

◆授賞式 二〇二三年七月七日（予定）



季音月

雁渡し

梅澤佐江

虫鬼灯夕日の色に極まれり
窓辺に立つや闇迫り上ぐる虫時雨
乾く程からくれなるに唐辛子
おもひ草貝紫の夕暮来
雁渡しなべて海向く異人墓

試歩の径

池田雅夫

十月の心構へを野に倣ひ
秋晴を背にゆつくりと試歩の径
故郷を語り尽くさむ温め酒
正装の雄姿居並ぶ秋の山
土手摺む枯芝の根の節あらは

ラフランス

松井由紀子

ラフランス手首撓はせ貰ひけり
卓上の異端のかたちラフランス
描く間をじわり熟れゆくラフランス
残照を透かせて昏し秋簾
窓の陽のすこしかなしき九月かな

登高

大場順子

登高や李杜の詩集をふところに
白根山の湖の碧恋ひ登高す
登高や松美しき島数ふ
義経の衣装のままの夜食かな
煌煌と落つる良夜の大華嚴

雁渡し

正木萬蝶

朝顔の真中に夜の名残かな
石仏に泪の跡や雁渡し
八掛見のらふそくゆらり雁渡し
鬼灯を鳴らす地球はまだ碧し
虫の闇沓脱ぎ石に下駄二足

秋の山 井上玲子

岩肌は柱状節理 秋の山
柚の音響き渡るや 秋の山
学問所の紅葉且つ散る日和かな
胡桃和へ母を偲ぶや伊那訛
うつむきて誰を慕ふや思草

秋簾 丸山マスマ

新涼や木曾川に乗る水馴棹
師の忌待ちほほづきに灯のともりそむ
海坂藩の路地に歩を置く夜長かな
句は未完耳を委ぬる虫時雨
秋簾巻きて風よぶ蕎麦処

風の盆 松宮保人

束の間の惜別なりし送り盆
哀愁を笠に隠して風の盆
虫の音に心引かるも虫嫌ひ
逞しき母田稗抜く夕薄暮
山畑に大の目玉や鳥威し

残暑なほ 井口俊晴

残暑なほ舗装道路の照り返し
水ばかり飲む老犬の残暑かな
蟪蛄の恋はなかなか命懸け
本名は疾うに忘れて赤まんま
万葉の大空かくや鰯雲

鶏頭花 高島寛治

我に向く緋の鶏頭花獣めく
チラシから食み出しさうな大秋刀魚
流星数多山間の闇照らすごと
芒原泳ぐ素振りて進みゆく
老猫も赤児も眠る秋の夜

待宵 森川義子

朝の陽に水色淡き思草
待宵の庭うす墨に静もれり
底紅の枝奔放に札所寺
月見船相席となる異国人
秋冷や鼓動曳きずる心電図

秋 鳥羽和風

秋刀魚焼く金の屏風は蔵の中
栗飯やアチャコ出て来る釜の焦げ
秋空へ投網放てば水の音
草紅葉血の海と化す古戦場
水櫛に淋しさ残る木の葉髪

夕月夜 山田美佐尾

橋渡り茶屋遊びする西鶴忌
筆持てば俳句の生まる西鶴忌
末席も心地よき風秋簾
ふるさとの山は寝釈迦か夕月夜
夕月夜浜の黒松影大さ

秋祭 藤澤喜久

くすつと笑ふ訛懐かし鶏頭花
子規庵の鶏頭の種貰ひ来し
愛称で呼ぶ友の居て秋祭
オルガンを囲む幼等赤とんぼ
終章に挟む葉や秋深む

鶏頭花 内田恵子

戦への怒りふつつ鶏頭花
競走馬の強き首筋鶏頭花
銀河澄むワープできぬか新幹線
桐一葉点検をする常備薬
桐一葉馬の手綱を長くせり

梨剥く 渡辺舎人

秋晴の一本道やわれ一人
海遠き街に嫁し仰く碇星
円相の金望月に妻棲めり
梨剥いて我あに言ひ聞かす独り言
斥候の覗き歩きや秋の蟻

敬老日 井上燈女

枯れ切つて赤さに徹し唐辛子
百歳まで生きた夫婦の敬老日
敬老日みな息災に老いにけり
風の威を総身にまとい案山子立つ
電話よく鳴る日今日は敬老日

エスコート 町野 広子

夏休み母に毒突く反抗期
のうぜん花欧州式のエスコート
淡淡と生きて麦茶を煮詰めをり
秋扇ひらひら明世の句が舞へり
一札で潜る新涼の大鳥居

秋暑し 森本 早苗

秋の宵オーブニングはかの「案山子」
スズメバチの巢の顛末や秋暑し
又しても脳の誤作動秋暑し
秋の風声紋預くアフラック
十六夜や一等席のカフェテラス

千年家 上戸 千津子

山を背に月に浮ぶや千年家
休耕田の観光大使秋桜
雨あがり川面は月の百面相
笑み交はし知己の如きや野路の秋
散歩中有明月が付き纏ふ

後 厄 福田 千春

ほほづきをふふめど乳歯抜けてをり
後厄の子は異国にて居待月
抱き人形の服のほつれや雁渡し
青北風や打ちあげられし深海魚
ていねいに玻璃皿納め雁渡し

力 石 荒井 俱子

横たはる像の遠目や鰯雲
鰯雲ボール蹴る子の長き脛
昼の虫寺に謂れの力石
旧道に残る石仏虫しぐれ
後の月今も地球に砲の音

赤とんぼ 井関 礼子

里道はくらし道なり赤とんぼ
里道の朝餉の気配赤とんぼ
赤とんぼ氏神詣で途絶えがち
板橋のせせらぎやさし赤とんぼ
雨待ちの移ろふ日々や赤とんぼ

法師蟬 川崎道子

文豪の旧居を移築法師蟬
熊楠の日記解読かなかなかな
敬老日手押し車がわがベントツ
秋彼岸白髪茶髪水を盛る
十六夜や門に出て待つ子の帰り

秋茗荷 野口和子

梨椀ぎにスケボーで行く店主かな
はちきれんばかりに太り秋茗荷
秋の宵コンロもの言ふ厨かな
カフェ建つと噂のしきり秋うらら
紫の風をこぼして葛の道

破れ芭蕉 西浦千枝子

花壇の隅で淋しく揺らぐ破れ芭蕉
植木鉢に名も知らぬ草伸びて秋
転勤の子の住む町の芋煮会
村に一軒茅葺き屋根に秋の雲
視力検査に兄が耳うち秋茜

桃届く 松山清子

贈られし句集熟読秋灯下
新涼や乳母車より犬の顔
蜻蛉すいすい足弱なれば指かざす
鰯雲組体操の崩れたり
御互ひに無事で居るなり桃届く

毎月25日発売 定価1000円(税込) 月刊 **俳句界** 2022年12月号

特集 90代俳人 深まる俳境
 ↳新作7句と自選句7句アケトを掲載！
 緒方敬 青山丈 岬雪夫
 山崎聰 安西篤 橋本美代子
 今井千鶴子 柿本多映 星野椿
 小繪山繁子 永島靖子

特別作品21句 大久保白村 堀田季伺
 ↳「時」を映す
 ◎論考「日本人の時間の捉え方 荒木優也」
 ◎「時刻がいきでいる俳句」今瀬一博
 ◎私の好きな時節「エッセイ21句」
 小島健 遠藤出樹子 寺島徹
 原朝子 田口美於 小野寺ヒロ

特別インタビュー 井上泰至
 ↳著書『山本健吉』と「俳句評論」を語る
 ※レザン社「稲一山田真砂年
 秘の冊」 中川雅雪「風港」

佐高信の目で「コンテハ！」
 瀬口侑希（演歌歌手）

「俳句界」投稿欄 一流選者14名
 日本「充実の投句欄」

※一部変更の可能性あります。
 株式会社 文藝の森 〆お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
 TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungaku.com

季音花

リハビリなか

河野 はるみ

秋高しリハビリの指ぐーちよきはあ
田んぼアートの顔がやの字に野分過ぐ
下手より端^{はな}は鈴虫能舞台
縄のれん潜る頭上に夕月夜
図書館の明かり灯るや夕月夜

季節の移ろひ

石田 慶子

片恋の君とほほづき神社裏
金継ぎの猪口にほほづき二つほど
初嵐営業中の札叩く
秋の風旅に誘ふプロローグ
震災忌かたかたと引く小引出し

母の文机 日高道を

せせらぎに映る白露の空の青
啄木鳥や山深ければ山の音
仲秋や母愛用の文机
秋の夜や不意にレノンを口遊む
字余りの一字を呪ふ秋の夜

声無き声 野田静香

品格を競ふ国花の菊まつり
星空に季語の飛び交ふ西鶴忌
赤い羽根声無き声を届けたし
待宵や夢二の描きし人を恋ふ
啄木鳥や暗号めけるドアノック

移ろひ 青木鶴城

小望月離れたくない指と指
移ろひや灯火の秋の電子文字
来し方にふたつ悔いあり曼珠沙華
毒茸を蹴りて迷路や樹林帯
典礼の供花の数や蚯蚓鳴く

枕木 近藤 徹平

枕木の間無邪気に秋の草
切支丹のオラシヨ聴く旅法師蟬
墨塗りし國史教科書敗戦忌
無住寺のいざなふ異界釣瓶落し
席譲る車内のサリー敬老日

後れ毛 保坂 翔太

蟬時雨後れ毛ひかる巫女溜
ため息と吐息に出合ふ街極暑
栗飯の好きなマドロス山育ち
底紅や半玉の笑む初座敷
瓜坊や電気機関車急停車

ぼんぼん蒸気 曲淵 徹雄

遠花火ことば少なに音を待つ
面影に焼玉の船秋めきぬ
蘇る美しき古里稲光り
武蔵なる国を一閃いなるび
夕風に鈴緒のゆるる処暑の宮

稔り田 大塚 茂子

手に余る梨の量感新種あり
裏武甲風にさやさや稔りの田
稲架掛けて子供も楽し隠れ鬼
蘊畜の夫並なみならぬ秋刀魚好き
九月来て母の炊き込みごはんかな

葉 指 檜鼻 ことは

いま少し返事待とうか秋の風
野葡萄へ紫色のアイシヤドウ
秋涼し眼鏡の街のチェリスト
二つほど知らぬ草の名秋遊び
秋涼し葉師如来の葉指

名月のひかり 石川 理恵

軽井沢をしやなりしやなりと秋の蝶
名月のひかり大きく吸ひにけり
食卓に会話はづむや松茸飯
立ち話長し秋簾の向かう
鶏頭の群れ紅すぎる怖すぎる

とろろ汁 原田 秀子

過ぐる季の後姿や九月来る
早天の光をうつし芋の露
食思なき夫に鞠子のとろろ汁
薯蕷汁ひき割り飯のなつかしく
熊野筆かるく紅刷く敬老日

葛の花 飛永 鼓

稻刈りや村の子みんな田に遊ぶ
今年又ざくつと稻刈る音に会ひ
葛の花ゆかしき色を散りぼうて
粟飯や曲りし指の母の味
谷駈けて村を閉ぢたる秋時雨

秋の野 笹本 啓子

真鯛やとんと使はぬ出刃の錆
秋草や下校の子等に秘密基地
手を繋ぐ男女の神や秋の草
野仏に子が手向けたる草の花
秋の野や絵の具はどれもべつちやんこ

背負籠 熊倉 千重子

道問へば振り向くかとも田の案山子
気負はずに学ぶ句の道秋澄めり
朝採りの唐黍溢るる背負籠
もろこしを一本鬻り破顔の子
変身の姿あざやか秋の山

親離れ 田中 章嘉

蓮の実の飛ぶはいよいよ親離れ
二度三度止まり直すや秋あかね
静かさや名月望む土手の上
鈴虫の並べて売るも花卉店舗
竜胆を贈る祝や敬老日

秋簾 瀬戸 雄二郎

秋簾役立つ日差し池の端
目隠しとして残されし秋簾
鶏頭は庶民の花よ福相寺
松濤に地上権有り鶏頭花
頭重くて花器見つからぬ鶏頭花

秋の山

宮崎 千アキ

秋の山湖面明るく染めにけり
風に乗る四方の香りや花野道
鈍色の水流れをり秋の陰
群をなし羽音烈しき稲雀
学習塾の駐輪場や秋ともし

船大工

松島 寛久

船大工 罔籠持ち山に入る
船に聞く威銃の田の黄金
稗知らぬ子に祖父のヒストリー
しなやかに暮夜に八尾の廻り盆
無尽の空が住処や罔鳴く

秋気澄む

葛城 千世子

入院日いまだ決まらず十六夜
秋気澄む微笑む遺影にゆるむ頬
長月や白木になびく巻線香
菊咲月遺影の母とおしやべりを
くつつきし夫婦位牌に秋日ざし

妻沼聖天山

下川 光子

歓喜天の彩とりどりに秋の声
異国めく彫物あまた秋の寺
大振りの名物 稲 荷 芋 嵐
片隅に丈競ひ合ふ鶏頭花
新しき家待つ空き地鶏頭花

空 蟬

中野 疆

鉢廻し向き会ふ朝の仏桑花
転勤の畔に燃えるし曼珠沙華
空蟬の横臥の時を迎へたり
飛びこみて部屋一杯に鳴く蟬よ
海の雷かすむ視界に連絡船

鰯

野平 美紗子

新婚の夕餉 今宵も鰯かな
なま鰯兄の真似して手開きで
秋草を双手に抱へ児の帰宅
伊勢湾やかかの台風の甦る
秋澄むや釣り舟映す鳩の海

秋の水 後藤綾子

秋の水旨し生氣の甦る
ふはり来るコバルトブルーの秋の蝶
不揃ひの石積むケルン濃龍膽
虫すだく坂登り行く無言館
友逝きて山河色無き秋の水

秋気澄む 宮崎紫水

学童の列真つ直ぐに秋の朝
予鈴はや全員出席秋気澄む
給食は和気藹藹に小鳥来る
下校児の頭上を行き来赤蜻蛉
理科室の暗がりの中虫の声

☆ ☆

俳句

12月号 予告

特別作品 大木あまり・岩淵喜代子・星野高士
予価950円(本体864円)®

大特集

五七五のさらに奥に迫る！ 見えない骨格

▼総論 俳句の定型とは何か………谷口智行
▼各論 形式・技法面／内容面から見る定型

座談会

令和の四十年代

堀本裕樹×西山ゆりこ×町田無鹿×抜井諒一

作品特集 沖縄を詠む

角川俳句賞受賞第一作 西生ゆかり

短編俳句小説 宮部みゆき『ほんほん彩句』

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

『水明誌』を繙く（水明九月号）

黒岩徳将（現代俳句協会幹事・青年部長）

水喧嘩有りし泉の静寂かな 向井章子

乾杯のサイダー風の通る椅子 内田恵子

水喧嘩は我が田に引く水のこと、田毎に争うことを言う。歳時記によってはまるで途絶えてしまったかのように書かれているが、農村部では今でもある光景だと聞く。

泉という季語は、その語感からして、清らかさだったり、人を寄せつけない空気感があったりする言葉だと勝手に思っていたがこの句はどうだろう。頭にどんと水喧嘩を持つてくることで、まさか泉に展開するとは思わず意表をつかれた。

主の季語を水喧嘩ととらえるのか、泉ととらえるのか。眼前にあるのは泉なのでこの句は泉の句だと言っても差し支えなさそうだが、主人公が水喧嘩を見たことがあっても、伝聞だったとしてもどちらでも面白い。主人公の視野は泉に固定され、人間よりも泉の存在が際立つ。この句の泉は喧騒を知っている。知っているからこそ、今は音を出さずに声を響めているのだ。

「有りし」で繋がれた言葉の距離は遠く、「有りし」が読者の脳内で時間を移動させる役割を十分に果たしている。もう一つの季語「水喧嘩」は名脇役である。

「乾杯」という言葉は経済効率がいい。二人であること、喜ばしい時間の始まりを瞬時に読者に呼び起こさせるからだ。逆に、あまりに便利な言葉であるがために類想が作られやすい。「風」と合わせて、この句がビアガーデンの光景であつたら言葉同士のイメージが近すぎて俳句としては興醒めである。そこを小さくひねって季語「サイダー」の登場。扉に近い海辺のカフェの席だろうか、あるいはテラス席だろうか。簡素な椅子に荷物を立てかけているのかもしれないし、海光を感じてもいいかもしれない。「椅子」で句をおさめているのは、視線が下に向くので少しだけ不思議だ。でも、再会するときのリアリティとはそんなものかもしれない。サイダーという季語を置くことで椅子やサイダーの周りのものも少しづつ想像が広がる。

ぶつけあつたサイダーからはまだ泡がしゅわしゅわとしていて、風はさつと過ぎていって心地がよい。中七の中間で切れが作られており、かつスムーズに読み下せる句のスピード感と内容がマッチしている。

現代俳句鑑賞

網野月を

映像の癌 美しや 寒 燈 高野ムツオ

〔俳句〕9月号・梅雨鴉より

MRIカレントゲンか、兎に角も癌の映像が映し出されているのである。その映像を「美しや」と見て思ってしまった作者の心の在り様に作者ご自身が驚愕しているのだろう。座五の季語「寒燈」の光り加減の所為になっているのだが、そのことくらいでは、「美しや」とはならない重大事である。心の容積を遥かに超えた時、笑ってしまうしかない状況に置かれることがある。「美しや」は将に人としての究極の心の形を表出している。他に「冬青空一角切つて胸に貼る」「梅雨鴉翼ひらけば捨聖」がある。

微熱から始まる花野ワルキューレ 久保純夫

〔俳句〕9月号・弥勒より

なかなか作者の意図へ百パーセント迫ることの出来ない作家なのである。リーマン予想もしくはヒルベルトの23の問題のようだ。それでも魅力の横溢する句作は、筆者を惹き付けてやまない。「微熱」は作者の対象に対するテンションの在

り様と解した。戦士と言えども乙女たちは花野によく似合うものである。このパズルは何時になったら解けるであろうか。他に「今生は大水青で待つている」「弥勒なるかたち透けゆく青楓」がある。

まつさきに風を選び分け糸蜻蛉 森野 稔

〔俳句界〕9月号・梅雨明けより

座五の季語「糸蜻蛉」は見るからに弱者の象徴のような景である。上五中七はその「糸蜻蛉」の属性を叙述しているようにも読めるのであるが、実は誰かのことを叙述しているのではあるまいか。「風を選び分け」ることをネガティブに捉えている訳ではない、「糸蜻蛉」はそうして必死に生きていくということを深い感傷を以って作者は言いたいのではないだろうか。「糸蜻蛉」へのエールとも受け取れる句なのである。他に「英語でも判る駅名梅雨明け」がある。

考える弥勒に蟬の曲がつてゆく 滝浪 武

〔俳句界〕9月号・弥勒より

どうして「考える弥勒」に「蟬」は「曲がつてゆく」のか

は問わなくて良いのだろう。現実だけを受け容れるしかないのだ。作者には余程の深淵がその空間には構築されていると思われるが、読者には十七文字の情報しかないのであるからそれよりも「蟬の曲がつてゆく」だけでも四次元的な詩域のコスモスを感じずにはいられない。「蟬」には魂のイメージをオーバーラップしている句作が多いのであるが、この句は魂のような言葉では言い表せない、もつと異次元のもの、有機体に何故生命が宿るのか、のような科学をさえ筆者は感じてしまっている。他に「像の目のうるむからりと夏の果て」がある。

楳や屋敷の前に木の小橋 山本鬼之介

〔俳壇〕9月号・小橋わたればより

嘗ては、特に由緒ある家柄を誇る家系の邸内には好んで「楳」が植えられていた。「楳」は常緑高木であるから正月飾りに供されて、新年の季語の区分に入れられている。だが花は五月から六月であるし、樹木としての旬は、旧葉と新葉の入れ替わる初夏が美しいと筆者は思う。屋敷の門前には小流れがあつて「木の小橋」が架け渡されている。屋敷だけでなくこの界隈は街並みからして、由緒ある土地柄なのであろう。上五の季語と中七座五の配置が恐ろしくいらにびつたりと符合している。他に「陣を敷く糺の森の梅雨茸」がある。

風薫るどんな小さな木にも詩 越前 春生

〔俳壇〕9月号・俳壇雑詠より

上五の季語「風薫る」で中七座五の「小さな木」を実景の

ように印象付けているのだが、筆者は勝手に「小さな木」を擬人法ではないだろうか、と捉えてみた。初夏の季節には何人とも詩人に成り得るのである。

方形を寄せる建物青嵐 ふけとしこ

〔俳句四季〕9月号・呟きより

何処かのビル街を連想させている。上五中七の「方形を寄せる建物」は無機質な表現であるが、その分、座五の「青嵐」が何とも自然の艶までも引き出しているようだ。筆者の大好きな作家の一人である。まだ御意を得たことは無いのだが、常々誌上で拝見してご示唆を頂いている。他に「むかしむかし蹴りし石かもかたつむり」「ジオラマの人に影ある寒の入」がある。

垂直に八月の来る足の甲 久下 晴美

〔俳句四季〕9月号・時間軸

上五の「垂直に」で頭を殴られた感じである。地球上の三次元的感性では、「垂直に」と言えば、通常地面に対して水平が維持されており、且つ座五の「足の甲」という表現から肉体の一部を挿入することで、「垂直に」は引力に対してと理解される。しかしながら掲句の「垂直に」の主体は時間を意味する「八月」である。日本の、俳句の世界の中では曲者中の曲者の「八月」である。単に引力に対してではないだろう。加えて地球という球体にとってはあらゆる地表に対して「垂直に」などあり得ないのである。これはやはり時間に対して「垂直に」であろうと筆者は結論付けた。他に「夏蝶の歪めてしまふ時間軸」がある。

俳句愛憎



網野月を

十四歳の時に同人誌を始めた。その同人誌には小説、詩、短歌、俳句（一行詩に似ていたようである）のジャンルを設けていたが、主宰者の一人であった私はすべてのジャンルにチャレンジしていた。それ以来、諸処の雑誌や結社、同人誌に所属しながら、十年くらいはすべてのジャンルに関心を持ち続けて作品を発表し続けたが、やがて小説は二十代半ばに諦めて、何時のまにか短歌の世界からも離脱した。そうして四十歳まで現代詩と俳句を並行して楽しんで来たのだが、二〇〇〇年十二月に詩集『最後に降った雨粒』を発表したのを最後に、俳句だけに集中することとなった。以来二十数年を俳句のみに力を尽くして過ごしている。

俳句のみに絞った切っ掛けは山本紫黄先生との出会いであったと今は考えている。来年八月には、その紫黄先生の十七回忌を迎えることとなる。先生の晩年十年余の月日にお教えを頂きながら俳句について取り組むことが出来たということである。この事実は私の最大の財産の一つである。紫黄先生から教わったことの最大のことは、酒の飲み方と俳人として

の生き方である。古き良き時代の俳人でおられて、観て、盗んで勉強しろ、というタイプの先生でいらっしやった。ある時、作句の要諦をうかがったことがあるが、「指を折って作るんだよ」と仰っておられた。今現在は、季語も大切だし、句意も大切であるが、リズムこそが俳句にとって最重要であるゾ、ということだろうと理解している。が今後、別の境地が発見できるかもしれない。私にとっては紫黄先生の言行は福音であり、私はエヴァンゲリストなのである。

閑話休題。私の俳名は三転四転する。はじめ藤井部勉であり、次に武川公、そして網野横月となった。藤井部勉と武川公は今でも他分野のエッセイなどで名乗っているペンネームである。改名は自分と文学諸ジャンルとの関係性の変遷に拠る。そして二〇〇三年夏から今の網野月をに改名した。改名してから二十年となる。いまだでは親から貰った名よりも「月を」の方が自分になっているようだ。

俳句を愛するとともに、俳句に費やした時間を考えると、仕事との両立をすることが難しかった自分を振り返ることと

なる。私は芸術史・芸術論の研究者であって、生業は大学教授である。出身大学の大学院では西洋音楽史を研究して学位を取得した。その後、三十代の頃にはベートーヴェンやモーツァルトの基礎研究をおこなった。四十代の頃に取り組んだウィーンの都市芸術と歌舞伎・落語などの日本近世の庶民芸能の比較研究は、自分としては新しさを求めたものであったと満足している。五十年代になってやっと俳句と芸術論の歩み寄りが出てきたように思っている。半ば強引に自分の仕事と俳句をコラボレーションさせてしまった、ということである。いまや所属の学部では最高齢であって、誰も苦言を呈する者はいない。勝手気儘な研究者生活を送っていると云っていいだろう。自分の仕事⇨研究⇨俳句というわけだ。与えられた時間の残すところ四分一の人生活ラスαを考えると、これほど効率の良い事はない。ベートーヴェンやブラームスのリズム感で、作句すれば好いというような荒唐無稽なことを夢想しつつ、毎日を過ごしているのである。「反対の合」これこそ芸術の成し得る醍醐味⇨自由であろうと大風呂敷を目いっぱい拡げて楽しんでいるのである。

そこで課題となるのが、何をどの様に俳句として詠むのか?ということである。いかに新鮮に俳句を書くか?ということである。それはどういうことを想定すれば良いのかというのと、例えばシェークスピアの戯曲の場合、俳優は台詞を読むのではなく自分の言葉として喋ることが出来るかというこ

とであろう。ピアノリストはモーツァルトのピアノソナタの譜面を再現するのではなくてインプロヴィゼーションのように演奏できるかということなのだろうかと考えているのです。

俳句は推敲を重ねるうちに自己の心の中で古臭くなっている、初案の新鮮な感動を反映した句ではなくなるのである。推敲は大切なのであるが、恐ろしい側面も有しているということである。席題や吟行が大切な俳句の手法であることの証ということである。江戸前の技の効いた魚も美味いし、漁師料理のような生きのよい魚も美味いのである。今の私は「指を折って作句する」ことが唯一の因がなのであって、この点は、これからの課題と思っているところなのである。

さて、今回は自選五十句を掲載させて頂きました。水明誌に載せた句ばかりではありません。最近の句から溯って選句しました。残念なことに自選五十句は五十一句目以降を切り捨てることになりました。自選することの難しさを改めて味わうとともに、思い入れの句の何と多い事か、も再認識することとなりました。これはやはり、自分の紙面スペースを企図しなくてはならないということに他ならないか、と思いを強くしています。

私事ですが、父が九月十二日に他界しました。作曲家を志した父でした。八月に緊急入院する直前に、「花びらは蕊を抱きしめ花に雨」を詞に長調と短調の曲を作曲して、残してくれました。父の絶筆となりました。

自選五十句

網野月を

数日を過ぎて雨水と気づきゐる
恋の猫隣家は売りに出されてゐ
びきびきびき一六八十恋猫来
啓蟄や上手く剥がせたエチケツト
初蝶や両の手ひらき逃しやる
右の目が右耳舐めるピカソの忌
南浦和始発おぼろやみな無口
風船に黒色なくて種結ぶ
ゴミ箱のなか春いろの包装紙
自分勝手に線を引く奴さくら東風
春愁や蕾の固さほどの罪

花びらは蕊を抱きしめ花に雨
春深し5より大きな4の文字
青空の大画仙紙をつばめのつ
スイートピー日当たりの好い令和かな
蛙の傘悪戯つ児は手に取らず
出迎へに同じお辞儀をする紫蘭
風かをる寺名に陋しき字あらず
春の寺羅漢に身障者はゐない
風光るドガの素描の踊り出す
発砲の野に金雀枝が雨の日も
誕生日なんて来なくていいのに梅雨の星
散骨といふには小さき黒金魚
血を分けた兄弟分の蚊を逃がす
夏果てて豆腐のやうに飽きられず

天皇が頭を下げて秋めきぬ
骨董屋は道にはみ出し秋めけり
秋の日や猫とグリコのポーズして
レモン日和青一色のティーカップ
秋澄むや曇りガラスの向かうに人
言伝の返事まだ来ぬ十三夜
グラシンの透けて書名や月雲に
室温のワイン二杯目蚯蚓鳴く
ベーカー街からホワイトへブン夜の霧
時計止めても時は止まらず秋の暮
左胸を摩るは右手冬ぬくし
手帳買ふ先づ戒名と誕生日
美味しいものは黙つて作る去年今年
前世は玉葱なりし冬の月

アドレス帳の削除のボタン火の恋し
失くさないために持たない良寛忌
ないないない仕方ないでも諦めない
恋人よ秋とは赤くなることか
恋人よあなたとゐれば赤くなれる
自動捲の止まつてしまふ月をの忌
老猫のわの字になつてみたりして
焮の字に師系を辿る如月忌
来世は山になりたき春の月
温かいものをください桜の夜
初花のはじめに散つてしまひけり

男盛り

原 雅子

月を氏、と書きかけてなんだか知らぬ人めいて落ち着かない。いつものように〈月をさん〉という方がしっくりする。

その〈月をさん〉と句会をご一緒するようになって二十年以上になるだろうか。当時、結社を異にする者ばかりの、齒に衣着せぬ句会の場に彼は現われた。その後まもなく、師である山本紫黄氏も加わって会は一層充実した。まだ若かった月をさんは、ここで貴重な俳句経験を重ねたかと思う。

この時期、彼の句は分かりにくかった。若さに似合わぬ博識が却って邪魔するようなどころがあつて、言葉の裏に意味を籠め過ぎていたのだろう。当然、批評の槍玉にあげられるだが今思い返してみると、紫黄氏はほとんど何も言わなかった。いずれ自分で分かることだと思つていらしたのではなかったか。人を育てるとは待つことなのかもしれない。

今回の自選五十句からは現在の月をさんの成熟と、斬新な試みとの両方を垣間見ることが出来る。

数日を過ぎて雨水と気づきぬる

何事もなく過ぎてゆく日々の暮らしの中で、いつの間にか季節が移っているのに気付く。おや、そういえばというくらい何気なさで。こんな微妙な季節の変化を若い頃には気にも留めなかつたろう。ふと洩らした眩きにも似た、さりげなさである。静かな余韻。

南浦和始発おぼろやみな無口

秋の日や猫とグリコのポーズして

言伝の返事まだ来ぬ十三夜

都心の勤務地に向かう乗降駅。ラッシュを避けて、まだ薄暗い時間帯の始発電車に乗り込む通勤客の影、影、影。詩歌の伝統的季語〈おぼろ〉の情趣はここでは払拭されて、むしろ人々の姿を均一化させるように使われる。黙々と出発を待つ者の一人として自分の姿も紛れてしまふのか。生活者の日常の一断面が示される。それでも爽やかな秋の休日には畳に寝転がって猫と遊んだりもする。グリコのポーズは走者ゴールインの形なのどうか。気持の良い秋晴の日射しを浴びて。そんな普段の生活の或る日或る時、小さな気がかりが続くこともある。直接問ひ合わせるほどでもないが、でも秘かに心待ちにしていること。ささやかな心のたゆたいを〈十三夜〉の翳りを帯びた月明りが浮かび上がらせる。些細な出来事や風景の集積が日常を形作つてゆく。

そして次のような句が差し挟まれる。

春の寺羅漢に身障者はゐない

羅漢像は大抵親しみ深い姿をしている。酒瓶を持つたり、哄笑したりして此の世を楽しんでいるような像も見かける。それにしても「身障者はゐない」とのフレーズは唐突すぎて驚く。昨今のように差別用語に過敏反応をする風潮では誤解を招きかねないフレーズだろう。尋常に書くなら、健やか、とか楽しそうとか、そんな収め方で済ますのではないか。秀句とは言いがたいこの句にはっとしたのには理由があった。作者自身の体験が、思わずこのような言葉に結びついたのではないかと推測である。

月をさんは子供の頃、足に大怪我をなさったという。手術は一度で済まず、成長の節目節目に数度の再手術が必要であったようだ。お母様はそういう彼を甘やかさず、殊更厳しくお育てになったらしい。本人よりも辛い思いでいらしたろうが、月をさんの人格はそれによって鍛えられたのではなかつたらうか。

暖かい春の日を浴びている羅漢に、君たち無事な身体でよかつたねと呼びかけたのかもしれない。

花びらは蕊を抱きしめ花に雨

植物学的にいえば花びらにはいろいろな役割があるのだ。種を残すための蕊を守るのもその一つ。だが、そんな植物の生態を云々する以前に無心にこの句を読めば、まるで恋人を抱きしめるような切ない優しさを感じてしまう。抱

きしめているのは（いのち）そのもの。

上五中七での近景から、「花に雨」と距離を取って全体を視野に入れることで一句の世界に奥行きが生まれている。

天皇が頭を下げて秋めきぬ

ここで詠まれている〈天皇〉は誰方のことだろう。作者の年齢から鑑みて昭和、平成、令和のいずれかになる筈だが、天皇という特殊な存在を思えば特定しなくとも句は成立する。とはいえ、「頭を下げて」の措辞が衝撃的に響くのは、戦後現人神から人間となった昭和天皇の場合だろう。ヒロシマ・ナガサキに続く八月十五日は昭和の時代に刻印された記憶としてなまなましい。それもこれも包み込んで「頭を下げて」と抑制した表現に感嘆する。

時計止めても時は止まらず秋の暮
自動捲の止まつてしまふ月をの忌

月日の過ぎる早さを意識し始める年齢がある。毎日を忙しく過ごしながら、ふと人生の残り時間に思いを馳せたりはしないだろうか。いやいや、やりたいことがありすぎて時間が足らぬというばやきかもしれない。

そういえば昔から月をさんは活動的だった。本業の学問をこなしつつ、楽しいことにも眼がない。何でも御座れの人である。私はこっそりこんな句を詠みました。（男盛りの健啖を誉め夜の秋）。月をさん、あなたのことですよ。

命

永野史代

手帳買ふ先づ戒名と誕生日
自動捲の止まつてしまふ月をの忌
右の目が右耳舐めるピカソの忌
散骨といふには小さき黒金魚
失くさないために持たない良寛忌
焔の字に師系を辿る如月忌

初っ端から忌の句を並べて申し訳ないが……。手帳を買った時、はじめに戒名と誕生日を書き入れるとは驚きだ。八十過ぎの筆者の姉が自分の戒名を作ったと云っていた。今や戒名はお寺の僧侶にお願いする時代ではないのだろうか？ 衝撃であった。《月をの忌》はいつ？ まさか忌の月日までは決められないだろう。自動捲の止まるその瞬間が月を忌と考えているのだろうか……。ピカソの忌の右目で右耳を舐めるには恐れ入った。ニース近郊で四月に逝去した画家のピカソ。月をさんならではの一句。小さな金魚を散骨にする。黒が利いてい

る。さみしいが発想も豊かで心の優しさが滲み出ている。今は犬猫等のペットも火葬してその一部をペンダントなどに仕立てて身に付ける人もいると聞く。良寛の句、失くさないために持たないとは……。良寛の生涯を云い得ている。余談だが横尾深林人という日本南画家の描いた色紙が筆者宅にある。「佐渡の山は雲の黛ひきて夕日まばゆき春のうなばら」の書と佐渡の山、左手に杖、右手を腰に当てた何とも良寛らしいしる姿、この背が素朴で気に入って掛けてある。氏の云う良寛の句に通じているのではないだろうか。焔の字は浦和の調神社のかな女先生の句碑に使われている。《生涯の影ある焔の天地かな かな女》水明の師系が脈々と流れている。それをすかさず一句にされた。

月をさんは今、水明で最も活躍されているお一人である。主宰の信頼を得て、句会指導、講義・講演、司会、水明誌の「現代俳句」鑑賞……。引っ張りだこだ。鶴川句会でご一緒したのが始まりか、それ以前に水明大会でお会いしているのかも。鶴川での氏は自然体の句、斬新な句等を出句された。吟行会や宿泊の折にはいつも率先してメンバーを助け、句会後は歌をうたい、袋まわしを楽しみ、幹事の広子さんお手製のリボンやおさげ編みの小道具で歌うリレーも行った。ある句会では落語を聞いて句作することもあった。合同句集「山百合」も孝太郎先生の元、月をさんが手際良く纏めて、第三輯まで出来上った。三輯は紫黄先生の七回忌特集で、句集「早寝島」解題の一文を寄せている月をさん。その「月を」の名

付け親にもエピソードがあるが、頁がない。某句会が都心で開かれた事がある。(東日本大震災で皆、帰宅難民)、先ず皆を誘導し、居酒屋でお腹を満たし、雄二郎氏(元、二木亭の主)と共に都の施設で夜を明かした。この絆は今も各人の胸の中にある。若狭行の思い出も貴重。若狭人のやさしさに触れた。現俳では数々の役をこなされ、現在 監査役。

ペーカー街からホワイトヘブン夜の霧

霧の街ロンドン。ペーカー街はシャーロックホームズの住んでいたアパート。ホワイトヘブンはアガサクリステイの主人公、ポアロの住んでいたアパート。二人の名探偵をさりげなく出した心憎い演出はお見事! そういえばウィーンへご一緒の旅をした事がある。大学の生徒さん数名と水明の四人。オペラ(カルメン)とバレエ(ジゼル)、最高の席で楽しんだ。全て氏の采配。幕間にはグラスワインを持って来てくださり、喉を潤した。洒落た計らいだ。モーツアルトの生家、街を訪れ、街の住民に挨拶される一面も。全て雪世界の広がるウィーン。列車や宿では学生さんの相談にのる氏。まさに至福の数日間であった。リーダーシップの月を氏だ。

数日を過ぎて雨水と気づきある

南浦和始発おぼろやみな無口

春愁や 蕾の 固さほどの 罪

二句目は(時雨るるや 馱に西口東口 安住 敦)を彷彿させる。次の春愁はさほど重くない罪ということか。比喩の使い方が上手い。

花びらは蕊を抱きしめ花に雨
発砲の野に金雀枝が雨の日も

ここにもう一つの氏の顔がある。詩集「最後に降った雨粒」ペンネーム、藤井部 勉。内容を詳しく書く紙面はないが、とても素敵な一冊で心に残っている。詩人月を氏の全ての句に詩が流れている! と気が付いた。ロマンチストである。

血を分けた兄弟分の蚊を逃がす

動物や花の句もある。蚊の句は仁義を心得てユニーク。五十句やその他の句で、総合誌などに発表されたものは、目のつけ所がとても良い。

〈恋人よ秋とは赤くなることか〉〈恋人よあなたとあれば赤くなれる〉あえかな句。赤・白……無季。筆者の好きな句でもある。

〈天皇が頭を下げて秋めける〉〈言伝の返事まだ来ぬ十三夜〉天皇の句には頭が下がる。十三夜は返事の来ない心の動揺を捉えた。ふと樋口一葉の十三夜まで思い起こさせた。最後に長谷川秋子師の二句を。

〈全身を煌とともして恋螢〉(一命に長短はなし螢の夜)

一句目は関東風土記放送原稿、秩父源流の螢をたずねてよ。秩父は氏の出自でもある。一命に長短はない、たとえ一夜の命でも全身を灯し精一杯生きる。潔い句が秋子師らしい。

この度はかな女賞おめでとうございます。最高の賞ですね。今後も幅広い句を、詩を詠まれますように。月をさんおめでとう!! (限りあるものは美し雪恋命 月を)

網野月をの

一句



青木鶴城

右の目が右耳舐めるピカソの忌

なかなか難解な句。若くして俳句にのめり込んだ作者は、多彩な句作りに挑戦し続けている。掲句は正にそんな句である。

四月八日がピカソの忌日。「物」を表や裏や色々な方向から画布に表現したいピカソは「キュビズム」を推し進めた。皆がすぐに思い浮かべる有名な「ゲルニカ」や「ドラ・マールの肖像」等がそうである。

掲句は、ピカソのキュビズムを意識した「立体俳句」と解釈する。右の目が右耳を舐める事などあり得ないのだが、キュビズムの様に一度対象物をバラバラにして、そのパーツを平面に戻してやると「右の目が右の耳を舐める」のである。

長谷川零余子が提唱した「立体俳句」とは全く意を異にするとは思いますが、ピカソを取り上げた掲句を取って立体俳句（キュビズム）と解釈した。

梅澤輝翠

出迎へに同じお辞儀をする紫蘭

紫蘭は初夏の野山や庭の木陰に俯くように楚々として咲き、謙虚で控え目なイメージを与える花です。颯やかな姿から「美しい姿」という花言葉があります。又「あなたを忘れない」という花言葉も。

そんな紫蘭に出迎えられる場所とはどんな所なのでしょう。それは野山にあつてハイカーの心に癒やしと安らぎを与え、頂への一歩に力強い活力を与えているのでしょうか。

それとも何処かの受付にあつて、訪れる人々に何の拘りもなく穏やかな優しい眼差で迎えてくれている紫蘭に気づく人も、気づかない人にも紫蘭はただ俯き加減に出迎えているだけなのでしょう。自己主張などせず、月を先生の句はいつも楽しいのですが難解です。それ故に新しい発見の連続です。

そしていつも穏やかに分け隔てなく豊富な知識を充分に与えて下さいます。

水明歴四十年これからも良き指導者としてご活躍下さい。おめでとうございます。

反町 修

青空の大幅仙紙をつばめのつ

大幅仙紙とは書画に用いられる大判の用紙である。中国の高級書画紙の宣紙に由来し、戦後日本でも生産されるようになった。

春の青空を眺めていると燕が飛翔している。巢作りをしたり、昆虫を捕獲したりと忙しく動いている。いつのまにか青空を大幅仙紙に見立てて飛翔する燕の水墨画を思い描いている。下五の「つばめのつ」という意表を衝いた表現を如何に解するか。この「つ」は促音的な響きがあり、燕の急な動きを表しているように思う。長閑な青空をつばめが過り急に反転して戻った光景を水墨画として捉え、それを俳句で表現したのではないか。つまりつばめ返しの一瞬を切り取り、それを水墨画に転換して俳句に詠んだものと想像する。これは筆者の妄想かもしれない。

作者はこのような実験的な俳句に果敢に挑戦し、また水明俳句会の運営幹事長の要職にあり、益々のご活躍が期待される。作者がかな女賞を受賞されたことは慶賀の至りである。

鳥羽和風

左胸を摩るは右手冬ぬくし

我々は神仏を崇める時、必ず両手を合わす。その胸中は人によりそれぞれであるが日頃の感謝とこれから先の幸せを願う事であろう。

月を先生のこの一句は途轍もなくスケールの大きな俳句である。今ウクライナとロシアの戦争が続いているが毎日多くの死者が出ており世界中が心配と悲しみに包まれている。一日も早くその終決を願っているが難しい様である。昔の事であるが笹川良一氏が「世界は一家、人類は皆兄弟」と言うテレビのコマーシャルがあったのを思い出している。そんな日は何時来るのであろう。常日頃胸中で世界中の人々の幸せを願っている容子を「摩るは右手」で表現している。冬ぬくしの様に穏やかな日が来る事を願ってやまない。

若狭の句会は特に月を先生のお世話になっている。これからも楽しい句会を通してご指導を願っております。

野田静香

レモン日和青一色のティーカップ

レモン日和とは何と爽やかな言葉だろうか。黄色と青色と香りが強烈に飛び込んできた。レモンは白くて可愛い花を咲かせる常緑樹。花はとても良い香りがする。花言葉は心から誰かを恋しく想う。

海が見えるカフェで、二人は静かに話をしていた。話が途切れると、恋人は海に目をやり、愁いを含んだ目差となった。作者もつられるように海に目を向けた。レモンの香りが引き金となり、お互いにひと夏の思い出に耽り、長い時間が流れた。紅茶は冷め、レモンの香りは薄らいでゆく。

ふと我に返ると、心做しか秋風が吹いた。青いティーカップが暗示するかのよう。色彩と香りの織り成す効果が、いろいろなドラマを生み出すことを学んだ一句だ。

日 高 道 を

風光るドガの素描の踊り出す

ドガと言えば踊り子の絵が有名です。

「風光る」の春の季語を配して踊り子が今にも踊り出すように感じるという、作者の前向きな気持ちを表現した句と読むことが出来ますが作者が作者だけに、それではあまりにも普通の句です。

作者に聞いてみますと、この句は「失恋」と表題の二十句連作の中の一句とのこと。

ドガは踊り子の素描（デッサン）を多数残しています。デッサンの踊り子は、その瞬間の静止（ポーズ）した姿が描かれています。

この句も失恋で世の中が静止しているように見えた時に、春の温かな風を受けて、自分の心も少し前向きに動きはじめたと感じた一瞬を、ドガのデッサンの踊り子と重ね合わせたものではないでしょうか？

最後になりますが、月をさん、この度の「かな女賞」受賞おめでとうございます。

檜 鼻 こと は

温かいものをください桜の夜

春は梅の花から始まり、三月の終りともなると花は桜のころとなる。

大勢で打ち興じる花見もよいけれど、一人で巡る花見もいいものだ。まして、夜桜を見るなら独りがよい。

近頃流行りのエルイーデー照明でライトアップされた桜よりも、月明かりや篝火に浮かぶ桜がよい。昼間とはまったく異なった表情を見せる。桜の夜、暗闇から誰かの声なき声が忍び寄ってくるようだ。

桜の花を愛でることが出来る期間は短くそれだけに切ない。夜桜ともなればなおさらのこと。「四月は残酷きわまる月だ」（荒地 上田保訳）とは、T・S・エリオットの言葉だが、夜桜の妖艶さは、残酷なほど美しく切ない。

「温かいものをください」の措辞に作者の心象風景を見る思いがした一句。

保 坂 翔 太

グラシンの透けて書名や月雲に

グラシンとは「光沢のある透明性の高い薄紙のことで書籍カバー等に遣われているグラシン紙」のこと。そういえば昔、半透明の白い紙カバーをつけた岩波の文庫本があった。懐かしさを覚える。

書齋の本棚にグラシン紙に包まれた古い本が並んでいる。若いとき以来、読んでいないような気がしたその本を手を取ろうとしていた夜のことであった。今まで、月が窓辺を照らしていたが、少し暗くなったように感じたので、窓の外に目をやると、月が雲に隠れていた。本の背表紙に書かれている書名も、少しぼやけているように感じた。

おそらく、思い出深い本だったので、グラシン紙を付けたまま保存していたのであろう。買った場所や日付を書いて保存していたに違いない。

本の題名は「雪国」「虞美人草」など高校時代に、手に取った本かも。いやいや、「リルケ詩集」だったかも知れない。

町野広子

元田亮一

由良ゆら女

夏果てて豆腐のやうに飽きられず

厳しい暑さの季節が終わる。特に今年の猛暑には、お手上げであった。しかし一方では楽しかった想いもある。

晩酌のあてに、冷奴の薬味を変えて毎日のように食す。どんなに好物でも、夏の終わる頃には飽きてしまった。此処で掲句を深読みすれば、豆腐には飽きたが、何かは飽きられずにいて欲しい。又は飽きられずに居たい。共に願望ではあるが、前者は他の対象物であり、後者はユーモアを交えた、例えば家庭に置ける、自身の位置とも取れる。後者ならば楽しく笑える。第三の読みとして、いくら食べても飽きが来ないの意にもとれる。

何れにしても諧謔味のある作者らしい一句である。

頭脳明晰、多方面への豊富な知識、更に多芸。本来ならば側へも寄せぬ存在であるが、知り合つて長く、年齢だけは勝る筆者を、その様に扱つて下さる紳士である。

春愁や蓄の固さほどの罪

所屬の句会で披露された句である。その日、一番多く選が入った句であるが、鑑賞は様々であった。「蓄」をどう捉えるかで解釈が紛糾した。曰く、為さずに留まった罪。曰く、過去に犯した罪。曰く、今は蓄だが、放置すると肥大する等々。

この句の鑑賞は、読者のこれまでの生き様を赤裸々に表出させたかのようにであった。鑑賞することが、自身の人生を語っているかのように思えたのである。これは、作者の意図するところであったのかもしれない。

この俳句を解くカギは、春愁にあるのではないか。春愁は心象的な季語であり、その解釈は人によつて分かれる。私には春愁と罪は裏表に思える。春がかつての罪を背負っているのである。その罪は大きくはないが、決して無くなつてはいない。速き日の胸に棘さす出来事に、思いを致す作者が透ける。

ゴミ箱のなか春いろの包装紙

咲き満ちた桜の下を多くの人が行き交い春を楽しんでいる。その金網状のゴミ箱の中の春色の包み紙に目を止めた作者。難解な所は少しもない。誰でも作れそうで作れない、作れない句かと思う。七、十の破調で七の下の切れと春からは明るい調子に流れることで、この包装紙は少しも汚れずはんなりとゴミ箱の中で存在する。読者も立ち止りゴミ箱の中にも春、を納得する。筆者はこの句に作者の感性と優しき、月並な所ばかり見るな、句材は何処にでもと教えられた。筆者は新しい句友にこの句の感想を求めてみた。「いい句ですね。娘の屑籠など何か詠めそう、ヒントを有難う。」一名、無言一名であった。

永年のご研鑽の上でのかな女賞ご受賞誠に おめでとうございます。今後月を氏のご活躍の巾はますます多方面に亘ることと思うが、それぞれの場にふさわしい作句とご指導ご活躍をお祈りいたしております。

わたしの近詠二句

笹本啓子

夏霞沖に釣舟のまれ行く

新型コロナウィルスが誕生する前、娘夫婦と館山に旅行した時の事です。宿の窓より海を眺めていると、霞に包まれた海へ、何艘かの釣舟が沖を目差して漕ぎ出して行きました。暫しのあいだ波間に見え隠れしていた舟が、何時の間にか、一艘二艘と霞の中へ消えてしまひ、まるで霞にのみ込まれた様でした。霞に消えた舟に不安感を抱きながら、海を眺めておりました。

初雪や陶の狸が薄化粧

我が家の庭に二体の陶狸が鎮座しております。この狸今は亡き主人と栃木県の益子に旅をした時に、丸い可愛い目に魅せられ、思わず買いためたものです。陶狸今は狭庭の要となり、私達家族の生活を見守っております。

ある年の朝、狸は初雪をまとい薄化粧をしたような態に……。雪を払って上げると可愛い目が、心做しか微笑んでいるように見えませんでした。

原田秀子

權なくも船漕ぐ夫の日向ぼこ

飛騨高山の古民家に魅せられた主人は、我が家のリフォームの際、築八十年余の広い空間に置囲炉裏を作ることにした。出入りの大工さんのセンスに任せ手斧目の残る梁に自在鉤をとりつけ、南部鉄瓶を下げ、物日には備長炭を熾し古民家風の体裁をととのえた。

アルミサッシの障子、フロアリング、何とも不釣り合な部屋が居心地のよい空間となった。ゆり椅子で船をこぐ夫。幸せな午後のひとつとき。

口遊むラビアンローズさくらんぼ

一九五五年「ここに泉あり」の映画が公開され「戦後のすさんだ心を音楽で癒やし、潤の生活を市民のために」と、群馬交響楽団が誕生し、その後画期的な音楽センターが建設された。爾来高崎市は音楽の街として成長を続けた。

私も三十数年コーラスを続け、ステージに立った。低音の私は勿論アルトパート。日本シャンソン館で聞き覚えた数曲は私の愛唱歌、「ばら色の人生」甘酸っぱいサクランボ。

檜鼻ことは

ほどほどに数へて手酌除夜の鐘
酒蒸しの汁までする浅蜷かな

對酒當歌「酒にむかいてはまさに歌うべし
人生いくばくぞ」と曹操が、かの赤壁の戦い
の前夜、歌に詠んだと云われているが、美味
しい肴に出会うとまずは日本酒を一杯いただ
きたくなる。

年越しの日は、お節料理の味見を兼ねて。
春ともなれば、鱈に鰹、忘れてはいけない浅
蜷の酒蒸し。筍の刺身に、露味噌なんかもい
い。夏が来れば榮螺の壺焼き、鱧は外せない
一品。鯖は脂がのった秋鯖がよろしい。定番
の焼き鯖もいけれど、秋鯖の刺身は絶品。
夏の土用は鰻をということになっているが、
秋から冬にかけての鰻のほうが、脂がのって
いて実は美味しい。鯖のなれずし、若狭鰯の
一夜干しは、とっておきの肴。取り留めがな
いのでこの辺で。

酒は常温がよろしい。酒本来の味が口にひ
ろがるのである。

保坂翔太

旅客機の窓から雪の剣ヶ峰

羽田より宮崎に行く折り、飛行機の左側の
窓際の座席に座った。天気晴朗、風穏やかな
日であった。山梨県上空に差し掛かったとき
左手の斜め下に雪化粧をした富士山を見るこ
とができた。剣が峰まで手が取るように見
えた。

何回か九州旅行に行ったが、このように雪
化粧した剣が峰を見ることができたのは初め
での経験であり、感動の一瞬であった。

山藤の垂るる切り岸舟下り

山藤（ヤマフジ）は日本の固有種で別名は
野藤（ノフジ）とも呼ばれ、ヤマフジ、ノフ
ジという名はその名の通り山や野に自生する
ことが由来となっているようである。

掲句の舟下りは荒川の長瀬ライン下りであ
る。義父とともにこのライン下りに乗船した。
義父は身を乗り出して景色に見入っていた。
岩畳を見、そして、対岸の切り岸を見ると紫
色の山藤が木より垂れ下がっていた。

曲淵徹雄

カラカラと笑ふ卒塔婆秋高し

秋の昼前、水明第三例会に参加するために、
京浜東北線に乗って埼玉から東京へ向かって
いた。電車が日暮里駅にさしかかる頃に窓の
外へ目をやると、線路に間近い崖の上に墓石
の並びと秋空が見えた。その時、以前に見沼
代用水に沿って散策した折、対岸にある寺院
の墓地の卒塔婆が風にゆすられて立てる乾い
た音が明るく聞こえたことを思い起こし、当
日の句会の兼題「秋高し」とつながった。

京劇もかくや天牛髭を振る

水明夏行の席題として、半紙に筆書で「天
牛」と貼り出された。星座の名を想像したが
カミキリムシで、季語だと初めて知った。

子どもの頃、故郷の村を流れる川の岸に生
える柳に、黒地に白い斑点の天牛を見つけた
ことがある。掴もうとするとキリキリ音を出
し、長い触角を振り回した。この天牛が、被
りものにつけた長い羽を振って見得を切る京
劇の役者の姿と重なるようにふと思った。

松島寛久

冬の山雲の去来と問答す

光陰の中に一つの蜜柑むく

俳句を詠む時に、心掛けている事を、少し述べさせて戴くと、最終的に俳句は、無常観を詠む事だと思っている。俳句には季語があり、四季の移ろいを詠む。

私は半農半漁の寺の住職をしている。野にも山にも海にも、題材には事かかない。同時に人々も海と山の移ろいの中に生活を送っている。そして俳句を詠んでいる人達がいる。春には木々が芽吹き秋には枯葉となり散って行く。海の色にも四季があり旬がある。若かった人々も、あつという間に年老いて、死んで逝った。どれだけの人々を、お送りし無常を感じた事か計り知れない。

青山元不動 白雲自去来

私の好きな禅語である。山は雨が降ろうが、風が吹こうが泰然自若と動ずる所がない。皆受け止めている。人も又、嬉しい事、苦しい事、悲しい事も合せ飲む大きな心が大事だと言う事であろうと思っている。

行雲流水、人々は皆旅人である。

この世の修行僧、雲水である。行く雲と流れる水。雲の行方の定まらず、水の一所に止まらぬ、事に執着しない何者にも縛られない自由人のことである。

俳句は無常と執着の無い世界であると思っている。それはそれで私は俳句のメ切り日と十七文字に指を折り、季重ねに悩み、発想に悩み、文法に悩む不自由な摩訶不思議な自分があることに気付く。

◆原稿募集

季 音 (雪・月・花) 卷末添付用紙

水明集 五句(卷末添付用紙)

鼓笛集 三句(二百字詰原稿用紙)

使用(編集部より依頼の
あつた方)

水明通信・随筆等自由にお送り下さい。

原稿宛先 水明俳句会 編集部

〒330-0064 さいたまし市浦和区岸町

四一〇一二

想子さん待っててね

網野月を

九月に原田想子さんが旅立った。行年? 多分八十を超していらいっしやったるう。俳友の付き合いはそうしたものだ。現役時代は警察関係のお仕事と伺っている。そのくらのことと良いのである。ただ、彼の俳句については分かっているつもりだ。

踏まれても燃えねばならぬ草紅葉
憂さ甘さ一気に大根おろしけり

漠の句なのである。そして彼独特の審美眼が発揮されている。

「水明創刊九十周年記念号」では長谷川かな女の「ねばりひきあるかと田向うの初蛙」の句を写真入りで評して頂いた。改めて氏は鑑賞文の名手でもあつた。呑んだ時には様々な笑い方が印象的である。

落葉踏む音は余生の生きる音

余生がどれ程あるのかは、誰も知らない。落葉踏む音を聴きながら、そっちへ行ったらまた飲み交わしましょう、と。待っててね。

山本鬼之介 選

水明集

城山の息をひそむる極暑かな
夏の灯や探しあぐねる日記帳
抜け道は昭和の団地蟬時雨
底紅の小さき傘閉ち落ちにけり
底紅の咲き誇る今朝娘発つ

越谷 阿部幸代

みなが去り独りしみじみ盆の月
新涼や文したたむるガラスペン
稲妻や暗き海へと突き刺さる
武蔵餅の機織の音も秋の声
泣き止みし園児の昼寝秋の蟬

さいたま 梅澤輝翠

墓参り母は留守居の無愛想
倒れても踏まれてもなほカンナの緋
切れ切れのブレードダンスカンナ燃ゆ
彼方よりヤッホーの声赤蜻蛉
赤蜻蛉しやくり泣く子の背に夕日

さいたま 渋谷さいち

八文字復習ふ半玉夜の秋
文弱な人は嫌ひよ単帯
嘘多め本音少なめ敬老日
借方も貸方もあり西鶴忌
親方の拳固が早し松手入

染谷正信

緑蔭を出でて歩速のよみがへる
緑蔭に古地図を広げ江戸めぐり
道路掘る重機の音の暑さかな
アンコールに応ふごとく雨後の蟬
少年兵の話や叔父の終戦日

上尾 横山君夫

一途な思ひ忍びきるや大花火
桃供へ悔恨少し甘くなり
析の実降るや惚ぶよすがも無き街へ
天の川妹漕ぐや瑠璃の舟
打水の上をいなせに人力車

吉川 杉浦理恵

ときめきを密かにたたむ晩夏かな
かな文字に曲がる線路の極暑かな
探り箸叱りし母や盆の月
白木槿ひと日逢瀬の紅を引く
秋日和犬は曾孫の好敵手

さいたま 清水桂子

畦豆や知名度高き里土産
白風をさらりと通す武家屋敷
たつた一駅武蔵野線の秋の旅
団扇もて弾まぬ会話煽ぎ立つ
葉の先で迷ひなく飛ぶ天道虫

さいたま 菅原真理

暁闇の天地をつなく稲光
薄紅葉方一丈の庵かな
逞しや廢家の庭にカンナ燃ゆ
滴りに生き返りたる歩荷かな
鬼灯を飾り迎ふる新仏

反町 修

吾をじつと見詰むるやうな盆の月
畑野菜底なしに吸ふ夏の雨
川釣りの月の天竜涼新た
樟の木の抱き込む神社涼新た
プロペラめく羽で飛び立つ天道虫

西幅公子

秋めきて湯宿の知らせ女文字
添書に「是非」の二文字秋めけり
初秋の風と行き交ふ巡礼路
時の間の茶花いちりん木槿かな
秋の蝶やけにくすぐる好奇心
爽やかに自然素材のワンピース
暁の峡の水音さやかかなり
手火花や闇に父母ゐるやうな
向日葵の迷路に憂さを捨てに行く
糸瓜の実振れば未来の音したり

伊奈 菅原卓郎

熊谷 越田栄子

平塚 丸屋詠子

さいたま 山岸久美子

長崎の鐘の音想ふ原爆忌
語り部の言葉は重し敗戦忌
鳥唄が心に染むる秋の夜
一心に終の調べか法師蟬
秋蝶のか弱き飛翔見とどくる
万緑を抜くれば広し海と空
無風の地あへぐ草木酷暑かな
遠のきし山車のにぎはひ角曲る
秋風と席ゆづる人好もしや
鈴虫や一際凜と終の声

ありし日を偲び墓參の涙かな
師の墓あるを知るや墓參の廻り道
大空を目差しカンナの伸びゆくよ
筋通す勇気をカンナから貰ひ
順繰りに数珠玉送り盆供養

さいたま 篠崎紀子

処暑の風聖歌聞こゆる石畳
処暑の朝工事現場の話し声
処方箋話題のはづむ敬老日
稲光墨絵に似たる夜景かな
園児らの寝顔の先の花カンナ

さいたま 村杉清吉

故郷の銀河の下に母ひとり
安住の地なりこの町天の川
法師蟬ひと鳴きごとに遠のけり
寒蟬や糠床確とまぜ返す
笑顔の奥の涙目隠すサングラス

岡田宣子

過去帳の紙捻のほつれ盆の月
文机の家紋の透かし夏座敷
寡黙なる父の遠泳海開
荷を造る宛名は浄土春衣
ピノキオの木偶の糸にあいの風

池田圭子

新涼や塵一つなき門前町
配られぬティッシュ山積み秋暑し
妻ひとり炎天の中帰りゆく
長き夜ややうやく点る「既読」の字
空蟬のたましひ残る夜明けかな

元田亮一

衰へぬ空に咲き継ぐ百日紅
日焼子の顔半分のマスク跡
乳呑児は水からくりや襦袢替ふ
滝近し足下の流れ疾くなりぬ
花烏瓜あさきゆめみし夜明かな

本橋稀香

赤とんぼ野外授業の豆画伯
こつそりと小唄師匠の墓洗ふ
カンナ燃ゆ妖しく誘ふフラメンコ
山頂のケルンに休む秋茜
村の長尻から落つる草相撲

新 曆文

蓋物を開けて潮の香夏料理
聞耳を立てて風鈴選びたり
風鈴を夜はしまへと隣家より
庭隅の茗荷を摘みて夏料理
夜は鳴らぬ風鈴なれどいとほしむ

杉戸 佐々木史女

堤防をそぞろ歩けば遠花火
陽を拝せば其処には既に牽牛花
鬼灯を握り幼はねむりけり
西行の戻しの松や秋澄めり
騎馬像の上空かける秋の雲

さいたま 加藤でん治

斥候の蟻の一匹孤高なり
吾が鼻に探究心の多き蠅
サイレンが猛暑の昼を突つ走る
相好を崩す婦人や菊花展
白木権隣家の娘嫁ぐとや

さいたま 飯田忠男

富士山を仰ぐ車窓の扇子かな
湯屋の看板「わ」の字は「沸いた」夏の果
大虹や戦無き世の橋となれ
秋の雲いつまで見ても只の雲
守宮出て吉事あるかに月明かり

新井孝磨

大岩盤を落下の滝のど迫力
新涼や茶事の稽古に井戸茶碗
忘れ物探し物増え夏深し
西瓜食べまた西瓜食べ認知症
三味の音や夜の町家の鱧落し

野村美子

カンナの緋スイングジャズの流るる路地
三叉路の角の洋館カンナ咲く
掃苔や山暮れかかり僧に逢ふ
暑がりの夫偲びつつ墓洗ふ
順々に形変りゆく秋の雲

霜多光代

あんぱんのおへそもひとつ秋の雲
秋濁き奈良の都の鯛茶漬
枝豆のさやを押すのも楽しき夜
女湯の中を聞きつつ夜食とる
家に着き駅弁を食ふ夜長かな

吉川拓真

武士を思ひ炎暑の城の階
梅雨明けや呆れるほどの陽の光
肅肅としきたり通り盆の月
大工の筆の築百年の納屋に蜘蛛
夏の雨上がり響くや解体音

森下美智枝

大出水流木猛る最上川
浅間山下山促す大夕焼
手火花や三年ぶりの孫子らと
恋恋の想ひ捨てさすつくつくし
妻には妻の我には我の晩夏の灯

鈴木藻好

椋鳥の賑やかすぎる駅通り
鶯草のすつくと二輪陽に向いて
ウルトラマンに思ひ馳せをり天の川
灯点せばががんば失せる網戸かな
大どろに息凝しゐる夏芝居

さいたま 綿貫ひさの

山帽子咲かせ老舗の蕎麦処
掃省せり車窓過りし山いくつ
朝日背に我が影と行く今日の秋
目標の歩数まだまだ秋暑し
湯の中で跳ぬる枝豆増す句

さいたま 斎藤みよ

金魚屋の午後は覆ひを深くせり
白映えに夏うぐひすの安らけし
人の世の波瀾万丈火花果つ
盆僧を待つ座布団の青海波
傷ひとつ無き芋を買ふ終戦日

大阪 遠藤人美

朝な夕な陽射し和らく秋はじめ
枳の実の多少彫らむ里景色
講釈の包丁研ぎ屋蟬しぐれ
路地裏に猫の影追ふ夢二の忌
文机の削られし角瀬祭忌

春日部 諏訪サヨ子

何処より南部風鈴一人の夜
蝸や大小怪しき穴有りて
境内の静寂に揺るる施餓鬼旗
蝸やスーパージェット見下ろして
新盆や友の墓前のクラス会

伊予 向井章子

庭渡る父の詩吟や夜の秋
弱小と言へど剣土や西瓜割
火花果て子を負ひ歩む家路かな
ふと見るやビルの狭間に遠火花
理科室から見ゆる睡蓮かくれんぼ

さいたま 小林京子

風に乗る隣家の風鈴我が窓に
表戸も裏戸も開けり軒風鈴
風鈴の音色確かめ旅土産
病葉や残すものなど何も無し
病葉を掃く古びたる庭箒

若狭 山崎郁子

鉢の朝顔工事現場を癒したり
盆栽の置き場所変へて涼新た
誤認して挨拶しどろサングラス
底紅や黒堀低き武家屋敷
宅配便に思ひを詰めし盆の月

竹澤和子

稲光仏壇照らす恐しさ

さいたま 千坂平通

燃ゆるほど赤きカンナの咲きし丘

カンナ咲く小径の景や線路沿ひ

焼野原の景色は遠し敗戦忌

肌焼けてくるや酷暑の交差点

油絵に描いてみたし花カンナ
墓洗ふひんやり井戸の手桶かな
逢ひたいよありがたうと言ふ墓参かな

さいたま 鳴海順子

カンナ燃ゆ熱戦続く草野球

積ん読の山があるから登る蟻

ジオラマの富士が火を噴き蟻の群

片蔭の猪牙に流るる新内節

艶嘶とまで長屋のなめくじら

森美枝子

七月や少年の背の黒き肌
避暑の宿橙色の灯りかな

野馬追や血走る眼武者と馬

灯籠のもの言ひたげに離れゆく
上掛をたぐり寄せるや夜の秋

奥山粉雪

妹と父を偲ぶや天の川

天の川国後島へかかりをり

鈴虫のしづかに鳴くや小さき駅

鈴虫の鳴き声聞こゆバス通り

実山椒流水麴の山レシビ

木村るみ子

明易や三線流れ島時間
ビル街の窮屈な空星今宵

花火果つ脳裏に宿る地の響き

撥振り上げ櫓の少年玉の汗

別れ難し南の島や晩夏光

草加 外村紀子

渋滞や右に左に盆の月

新涼や北の大地を手で包む

宿題の朝顔鉢に気を揉みぬ

早朝の掃除さはさは秋涼し

丹精の朝顔店の顔となり

小川洋子

活きの良いかけ声が飛ぶ夏祭
「内緒よ」と口もと隠す秋扇

虹の足立ちしあたりに尼の寺

夕風や島を取り持つ長き橋

青簾人気は和風スパゲティ

さいたま 湯浅 和

竹籠の鈴虫鳴かず腕まくら
白桃や皮ひく指のほの白し
やはらかに日傘の影を乳母車
炎昼の抜け道行けば行き止まり
風そよぎ悩殺ポーズ案山子かな

川口 新井のり子

夜泣きする赤子あやすや梅雨の星
天も地も洗はれ清し梅雨の星
子守宮の窓にはりつく手の愛し
「よく来たな」壁の守宮に父の声
ワンルームの終の棲家に守宮来る

さいたま 後記朝香

初秋や影伸ぶる球児甲子園
陽水の「少年時代」聴く初秋
例年の賑はひ遠く蟬仰臥
日がな一日独り淋しく鳴きし蟬
食器洗ひをトランプで決め夏休み

春日部 仲田利子

申カツの串立て溢る土用かな
源平の戦さのごとし未草

秋谷風舎

夕顔の耳敲つる百物語
結び上げし襟足光る土用かな
カーナビの声気怠げに土用入
村の灯の消えて銀河のいよ濃く
鈴虫を買ふ月あかり買ふやうに

さいたま 横山礼子

木漏れ日の小径の端の苔の花
西芳寺縁に正座や苔の花
部活後のシャワー室から笑ひ声
路線バス終点までの窓の虹
手を合はせひたすら祈る原爆忌

武田重子

しらびその匂ひ流るる天の川
小窓より見上ぐる銀河尾瀬湖畔
つぎつぎと咲いては散るや白木槿
近づく素知らぬ顔の月鈴子
黙食や鈴虫の声響きをり

樋口元美

観察画糸瓜の花に未来見ゆ
学校の糸瓜カーテン上昇中
糸瓜揺る画帳はみ出す蔓の先
効能添へ母に届けし糸瓜水
ふるさとの重なる稜線さやかなり

緒方みき子

睡蓮や気高く遠き神の花

さいたま

川島夕峰

寝苦しさしばし忘るる夜の秋
夜の秋縁側で切る足の爪

盆まゐり行き交ふ人の変はりゆき
クーラーを弱にしてまた強にする

アルプスの峰くつきりと桃熟るる

森 和子

大き桃こはごは挽ぎて胸に受く
桃すする少女は肘を尖らせて

鍵探す鞆の底に秋扇
客待ちの易者頻りに秋扇

夏空のへりよりボール甲子園

和歌山 高橋満耶子

応援歌の響くグラウンド夏の空
竜舌蘭は突如によきによき天を突く
思考力のどんどん下る熱帯夜

階段の新たな手すり西日焼く

鈴虫や翅脈を擦り音の清し

さいたま 小駒さち子

声澄みて髭もお洒落な鈴虫よ
天の川語る二人の縁結び

薪足して火の粉か星か天の川
大空に緑の大輪揚火花

東京 飯室夏江

雲海のゆらぎし波に山の影
爽涼や船尾の描く水脈長し
駅さやか最高地点の小海線
糸瓜棚双子二組休みけり
退院日までは切らずに青へちま

東京 山中いちい

朝顔の解け萎みし濃紫
朝顔や藍の着物を手に取りぬ
朝顔や雨ふるまじく今朝の空
今日一日何もせぬまま夏の月
厩橋東詰にて盆の月

さいたま 岡田芳春

鶏頭花女はいつも強きもの
殿方も傘を手にするこの残暑
線香のけむり数多や秋暑し
迎へ火や懐かしき声したやうな
人を待つ手の置き所秋扇

鈴木香音子

鶏頭や脇にひかへし道祖神
鶏頭の拳に夕日朱朱と
一陣の風の疾くて残暑かな
主なき門に一枝桔梗かな
鶏頭のあかき拳や風そよと

花莫塵に類ひんやりと微睡みて
藍浴衣きりり着こなす佳き女
夏休みスタンプ集めに体操へ
遠花火河原に住みしホームレス
まくなぎを振り払ふ手や踊り出し

東京 畑宮栄子

オクラの芽空に向ひて前進す
太陽の光の中の蟬の声
さるすべり色あざやかに旧家かな
青柿も重さうになり雨の中
なつめの実風にゆれぬる昼さがり

鬼石 加藤ナヲ子

祭太鼓厨の桶の水震へ
汗飛びて鉄輪軋み回る山車
朝顔の大輪ロビーに取り敢へず
朝顔や朝はこの頃唄れ声
三年忌笑顔見付けし秋の雲

さいたま 和田仁八郎

虹たちて羽黒の山へ置き土産
蛸をトレモロと聞く奥州路
かなかなに追はれて急ぐ湯の宿へ
終戦日安堵の母の顔浮ぶ
敗戦忌もし入隊をしてをれば

さいたま 川村 治

お地蔵に誰が乗せたか夏帽子
子らはしやぎ去りて螢がはしやぎ出る
静寂の闇を纏ひて舞ふ螢
葉の裏に隠れたつもり螢の火
やはらかに握る手洩るる螢の火

北出久美子

蛸やいのちの限り鳴いてをり
一病を得てかなかなを聴くばかり
秋暑し熱戦の声甲子園
球児らの顔赤銅や秋暑し
秋暑し溝の泥あげポランティア

染矢峯雄

炎昼や遊具ぼつんと園庭に
切りもなく犬と遊ぶや夕涼し
コーヒーと固めのパンやパリー祭
ワイン手に芸術談義パリー祭
子供等は網もて蜻蛉追ひにけり

高原和子

厄除けの風鈴靡くいつせいに
白服の鎖骨の浅き窪みかな
まくなぎを連れて川辺のサックスよ
廻廊のことに光りて涼新た

川崎 鈴木玲子

夏の日や寸暇惜しみて勉強す

夏草や伸び放だいのガードレール

極楽やりんごの上の猫の顔

炎暑にも亀は大食自力あり

新涼や放課後の声弾みけり

茶の湯気に揺るる月餅虫の夜

揚げたての天ぷらの音虫の声

深更の在宅勤務虫の声

庭隅の白粉花に少女群れ

祖父偲びダリア庭より剪り供ふ

大丈夫と笑顔の父母に百合手向く

夏果や都心の友の墓苑訪ふ

門灯下集団自死か蟬屍

稗粟の転げる墓域数珠の音

コロナ禍や卓袱台廻る盆踊

雨上り庭にはびこる螢草

風誘ひ火の神宿る鶏頭花

独り身にならぶ空き缶残暑かな

長き夜や季語をまくらに舟をこぎ

秋なすび平和ほけなるワイドショー

和歌山 南條きわゑ

御僧のゆるがぬ正座夏の足袋
迷はずに帰り着きしか送り火に
初盆のしつらへしつ待つ便り
盆踊笛と太鼓と下駄の音

和歌山 嶋田洋子

さいたま 鈴木敦子

蒼天の古代遺跡を瑠璃蜥蜴
足早の白猫の影油照
鶏頭の元に捨てらるゴムボール
鶏頭やテンポ乱れしフラメンコ

さいたま 竹内万美

宮代 関谷多美子

ペダル漕ぐ前を譲らぬ鬼やんま
まづ一句そのあとの二句夜半の月
肅肅と吞まるる列や美術展
秋めくや終りまであるレイトショウ

石関六弦

東京 水落守伊

枝豆の塩が決め手の笑顔かな
枝豆や人待ちながら時止まり
ハンカチもメガネも飛ぶや大噓
向日葵や地球の果も包みけり

福田育子

草加 持永喜夫

道と言ふ道なく続く花野かな
菊月の空を広げて庭師去る
転まびつつ大きくなりぬ芋の露
手に一つのせたる桃の重きこと

古池恵里子

手土産のメロンに生ハムのせ一献
父の日や「出張帰り」と二泊せり
送り火を済ませ去ぬ孫夜行バス
夏負けを引きずる老いや鴉の灸

藤 沢 小島喜代子

飲み合はせのまずき葉や盆の月
年下の遺影が語る盃蘭盆会

鬼 石 榊原聰子

草をわけ土かきわけて茗荷の子
思ひ切り剪る溝萩を供花とせり

所 沢 関根千恵

ばあちやんのおやつ団子と衣被
秋桜風といつしよに揺れてをり
秋爽の歴史を開く城下町

母逝きて明かるすぎたる夕月夜

故郷へ積乱雲を引き連れて

大 阪 飯塚智恵子

たこ焼屋雀も通らむ夏真昼

夕虹や祖国を問へばスリランカ

中年にもて遊ばれし秋扇

さいたま 落合和枝

白桃や赤兎のやうにそつと手に
秋扇名残りをしんで引きだしに

舞ひ踊る緑のカーテン野分中
鈴虫や誘ふ姿はハート型
待ちわぶる浴衣姿の後ろ髪

さいたま 小田美智

室外機振動止まり虫のこゑ
ガラス戸の小さき指あと野分過ぐ
今此処に草蔭選び虫のこゑ

河井育子

庭草に叢雨降りて月鈴子
鈴虫や祇王寺の尼輪唱す
救急車来声をひそむる月鈴子

糸井しるく

甥の手の文鳥静か夏盛る
山の日や湘南道路大渋滞
ぱたぱたと天窓の鳴る夜寒かな

山下ユリ子

我が父母の位牌を盆に新調す
原爆忌その日に合はせ会議持つ
鎌倉や関谷の野菜夏市場

藤 沢 藤田寛二

台風や収穫間近の落ちし実を
雨止みて虫合唱の響きをり
雨上り虫の音まどふ夜散歩

さいたま 村山八千代

作品評

山本鬼之介

抜け道は昭和の団地蟬時雨 阿部幸代

昭和20年に終戦となり、以後の住宅難解決の一策として、昭和30年から40年にかけて各都市に住宅団地がどんどん建設され、日本の高度経済成長の波に乗って発展した。それまでの庶民生活から一変した寝食分離とテレビ・洗濯機・冷蔵庫の三種の神器による近代的な団地生活は、20代から40代の子育て世代を中心に大人気であった。時流に乗って発展した団地であったが、その後年を経て建物の老朽化や住民の高齢化など多くの問題を残してきた。

掲句の団地は、建て替えや居住対象者の見直しなどを講じつつ昔のままの場所に残っている団地かと思われるが、商店街や最寄り駅に行くのに団地内を通るのが近道なのである。作者の若かりし頃もそして現在も、日々の生活道路でありまた憩いの場でもある親しみ深い団地である。

武蔵緋の機織の音も秋の声 梅澤輝翠

武蔵緋は、東京都武蔵村山市付近で織られている木綿緋のことだ。昔は村山緋とか所沢緋と呼ばれていたようだ。全国各地で、昔ながらの素朴な織物の技法が伝承され、物の豊富な現代においても好事家によって愛用されているのである。秋のひと日、この地を散策していると、何処からかリズムの良い機織の音が耳に入り、以前聞いたことがあった当地の織物のことを想い出した。

赤蜻蛉しやくり泣く子の背に夕日 渋谷さいち

悔しい思いをした時などに自分の気持の整理がつかずに肩をひくつひくつと震わせて泣くしやくり泣きである。この場所は野原か下校時の川の土手道か田圃道と言った処か。嘯り状態がなかなか治まらぬ少年を心配するかのように、赤蜻蛉が周りを飛び交っている。その子の背を夕日が優しく包み込んでいる。

文弱な人は嫌ひよ単帯 染谷正信

江戸時代の武士の世界で言われていた文武両道の観念が今なお継続しているのである。今風に言えば、学術面とスポーツの両方に秀でた人ということになるが、それに該当する人はそう多くはないだろう。

掲出句の単帯から察して、『嫌いよ』と言っているのは、

行動的で勝ち気な若い女性と思うが、池波正太郎の代表小説の一つ「劍客商売」に登場する「佐々木三冬」の言葉『自分を劍で負かす男でなければ嫁がない』がびったりである。

緑蔭を出でて歩速のよみがへる 横山君夫

毎日実行しているジョギングのコースにある緑蔭かと思う。一定の速度で歩いているが、夏の盛の緑蔭ではついその快さに負けて速度が落ちてしまう。しばらく緑蔭で休憩したいところだが、心を奮い立たせて緑蔭を出る。歩速が元に戻った。

天の川 妹漕ぐや瑠璃の舟 杉浦理恵

中国伝来の七夕の行事を背景に、秋の夜を美しく神秘的に彩る天の川を、妹を偲ぶ切ない気持を投入して詠んでいる。美しい色の一つである瑠璃を散りばめた舟を漕ぎ、天国にいる妹が天の川を渡って行くという夢のある発想が秀逸である。

秋日和犬は曾孫の好敵手 清水桂子

曾孫は一、二歳の幼児で、犬は家の中で飼われている柴犬か小形の洋犬であろう。犬は大人に対するような服従心は無く、犬の仲間のような思いで曾孫と遊んでいるのであろう。曾孫も犬を自在に動き回る玩具のように思っている。穏やかな秋の一日、見ていて実に微笑ましい光景が続いている。

曉闇の天地をつなぐ稲光 反町 修

稲光は雷と同様に放電現象によって発生するものだが、雷のような音は無く、発生しても気がつかないことが多い。夜明け間近に小用に立った作者が、月も星も無い暗黒の空に走った稲光を偶然目にしたとしたら、平時のそれよりも数段レベルアップして見えたのであろう。その思いがこの一句に書かれたのかと思う。

添書に「是非」の二文字秋めけり 菅原卓郎

この添書は、手紙に書かれたものかと思うが、受け取った手紙か、それとも発信する手紙なのか。筆者は前者だと判断した。「是非」は相手に対する強い願望を表す言葉であるから、この手紙を書いた人が何かを望んでいるのである。季節が巡り大分秋めいてきたことを前提に推理すれば、「近々○○展を観にゆくつもりですが是非一緒に……」と言うような気軽な誘いと受け取れるが、事によっては、重い内容かも知れない。女文字の浮き浮きするようないざないなら此の上ない飲びなのだが。

手花火や闇に父母あるやうな 越田栄子

樹木に囲まれた庭の暗がり、明るく照らし出される手花

火である。子供の頃家族で楽しんだ家庭花火大会の光景が想い出されてくる。父親が大きな花火を持って子供達を歓ばせ、母親が燃え殻を片付けてゆく。花火明かりの届かぬ暗がりから、父母がにこやかに現れるような気がした一夜であった。

畦豆や知名度高き里土産 菅原真理

畦豆は田圃の畦に栽培される大豆のことであるが、本句ではビールの摘みに最適な枝豆のことだと思ふ。その土地特有の土壌の養分を吸収して栽培された畦豆は、それぞれが独特の味を持っている。青森県津軽地方の「毛豆」、山形県庄内の「ただぢゃ豆」、新潟県の「黒崎茶豆」、兵庫県の「丹波篠山黒大豆」、京都府の「紫ずきん」など、米ほどではないが十指では足らぬブランド名である。故郷土産に土の付いた取れ立ての畦豆を貰ったらさぞかし嬉しいことだろう。以前鶴岡市の白山とよしろという処に産する「白山ただぢゃ」（ただぢゃお父さん）という畦豆を貰ったことがあったが、今なおあの絶品の味が忘れられない。

川釣りの月の天竜涼新た 西幅公子

たいへんリズムの良い俳句である。天竜川上流での鮎釣りであろうか。皓皓たる月が川面に映り、釣り師が黙々と棹を操っている。初秋の夜風が頬を撫でてゆく。釣果や如何に。

鳥唄が心に染むる秋の夜 丸屋詠子

鳥唄とは、奄美や沖縄などの南西諸島の民謡を意味するもので、琉球音階に合わせて三線と太鼓を主楽器として唄われる。旅行して現地の古老の生の唄を聴くことが出来れば最高であろうがなかなかそうもゆくまい。音楽会やライブハウスで聴くだけでもよからうし、自宅のテレビでもそれなりの雰囲気に入ることが可能である。要は、「鳥唄が染みる心」を持つことが大切なのだと思う。

万緑を抜くれば広し海と空 山岸久美子

広大な森を抜けて海を一望する丘に出た。それまでの暗さに慣れていた眼が戸惑うほどの明るさで、眼に入るのは、見渡す限りの水平線と大海原と接する果てし無い空。感動というよりも人間界とは異なる場所に来たような感覚に襲われたのではなからうか。

筋通す勇気をカンナから貰ひ 篠崎紀子

日常生活の中で道理に外れたことを言われたり、されたりすることがあると思うが、自分の考えに沿ってそれを一つ一つ正してゆくのは難しい。しかし、相手とやりあっても筋を通すことが大切だと思う。いわゆる泣き寝入りは良くないし、

後々悔いが残つて身体を害する。この句を読んで、作者の実
体験ではと思つた。カンナの力強い色彩である。

法師蟬ひと鳴きごとに遠のけり 岡田宣子

初夏の松蟬から始まつて夏の間いろいろの蟬が鳴き、夏の
終り頃から法師蟬が鳴き出す。秋が近づいたという思いと相
俟つて、法師蟬の鳴き声が夏に疲れた人々の心を癒す。もう
少し居てほしいと思つても忙しそうに行つてしまふ。己の余
命を惜しむように……。

妻ひとり炎天の中帰りゆく 元田亮一

単身赴任中の作者の住まいを訪れていた夫人が自宅へ帰る
時の様子を詠んだ句であろう。妻を氣遣う夫の氣持と、暫く
また離れることになる妻の淋しさを、中七のフレーズを媒体
にしてしつとりと表現していて好感を持つた。

こつそりと小唄師匠の墓洗ふ 新 曆文

なかなか洒脱な俳句である。秋の彼岸に訪れた菩提寺の墓
地。自家の墓を洗つた後、家人の目を盗んでむかし小唄を習
つた女御師匠さんの墓を洗つたのである。特別な関係は無か
つたが、何となく氣が咎めたのであろう。掲句の内容が創作

であるとすれば、なおさら作者の技量を買う。

処方箋話題のはづむ敬老日 村杉清吉

作者にはまだ早いと思うが、後期高齢者の間で交わされて
いる医者談議と薬談議の様子に取るように伝わってくる。
その様な仲間の中に日頃医者と薬に縁のない人が居たとす
ると、何となく肩身の狭い思いをするのではなからうか。季語
を通して我が国のおかしな現状をさらりと詠んだ秀作である。

文机の家紋の透かし夏座敷 池田珪子

代々大切に受け継がれてきた高貴な文机であろう。何と言
つても家紋の透彫がそのことを物語っている。季語の夏座敷
は、用い方によっては並の座敷になつてしまふが、本句は正
に季語のお手本とも受け取れる清楚で品のある夏座敷を表し
ている。

滝近し足下の流れ疾くなりぬ 本橋稀香

鬱蒼とした樹木に囲まれた山道を下っている。遠くから聞
こえてくる音に耳を澄ますとこの先に滝があるよう、足下
を流れる谷川の流れが先刻より速度を増したように思える。
自然と一体になつての状況把握も山登りの楽しみであらう。

水琴窟

(水明集九月号鑑賞)

池田雅夫

火蛾襲ふ夜間工事の投光器

飯田忠男

蝶以外の隣翅目の仲間を「蛾」と呼び、日本には五千種ほどいる。夜は灯に向かつて飛んでくる。交通量の多い幹線道路であろう。昼間は交通量が多いので、少なくなる夜間に工事が行なわれる。強力な「投光器」を襲うかに蛾が集まる。

鳩時計の眠たげに鳴き春深し

後記朝香

「ポポッ ポポッ」と時を知らせる「鳩時計」。宵も深まること、その鳴き声の数を増すにつれ、どこか「眠たげに」聞こえたのだ。「春眠暁を覚えず」のことばどおりに、鳩時計の声でさえ眠たそうに感じたのだ。深まる春のひとこま。

十葉の占領許す空家かな

小川洋子

「十葉」は「どくだみ」の異称で、その生葉のこと。繁殖力が強く日陰を好む。空き家となって人の手がゆき届かない庭は、あつという間にどくだみのはびこってしまった。仮に自身の家として、「空家かな」に自責の念が現われている。

天晴な引き分け試合麦の秋

綿貫ひさの

この夏の甲子園。熱戦の末に引き分け再試合となることもあった。「麦秋」はもう少し早い時期で、県大会のころ。全力で戦った末の「引き分け」を「天晴」と称えている。

父の日の似顔絵のあるカレンダー

山下ユリ子

「父の日」は六月の第三日曜日。母の日ほどには祝ってもらえないようであるが、それぞれが感謝の気持ちを感じ形のあるもので表わしている。幼い子が描いたのであろう「父の似顔絵のカレンダー」。家族の絆の強さに深い感動を覚えた。

武蔵野を鷺づかみして夕の虹

和田仁八郎

夕方の虹は、西空から射し込む陽の光に照らされて、東の方角に大きな半円形を描く。「武蔵野を鷺づかみして」に、その大きさが窺われる。「虹のかけ橋」などたとえられるが、「鷺づかみ」の発想に驚いた。武蔵丘陵からの光景か。

一跨ぎほどのせせらぎ虫飛ぶ

嶋田洋子

郊外の市町村では「ほたるの里」と称して、水辺を整備し、ほたるを育てて観光につなげているという。豊かな自然の里山だろうか。「一跨ぎほどのせせらぎ」の措辞が穏やかな日常生活を映し出し、子供たちの歓声までも想像させる。

鶏の小首かしげる梅雨の空 染矢峯雄

いつまでも降り続く雨に小首をかしげて空を仰ぎたくもな
る。鶏の小首をかしげる仕草を見逃さず、「梅雨の空」に結
びつけたことに感心した。「そろそろ降りだしそうだ」とか、
「いつまで降り続くのかな」などと思っているのだろう。

立て掛けし傘の余滴や梅雨の星 樋口元美

筆などの先端に余ったり残ったしづくを「余滴」という。
夕方まで降っていた雨もようやくあがり、夜には星がうっす
らと輝いている。「傘の余滴」という細やかな事象で捉えた
ことで、余滴の光と星の輝きが呼応して晴れやかに感じる。

青芝刈る娘庭師のヘルメット 山岸弘子

大工、左官などと同様に、男社会の感が強い「庭師」の世
界にも女性の進出は珍しくない。ヘルメットを被り、芝刈機
を操る姿が眩しく映る。単に「芝刈る」ではなく、「青芝刈
る」としたことで「娘庭師」の初々しさを強調している。

六畳の仏間明るきアマリリス 加藤ナヲ子

「アマリリス」の花は百合に似ていて横向きに咲く。南ア
メリカ原産で園芸用として愛されている。鉢植えならば咲い
ている期間が長い。明るく賑やかな仏間であったことだろう。

西日射す机上に書き置きの一枚 小山敦子

一昔前のことであろう。何か急な用事で出掛けなければな
らない。そこで、書き置きを残していったのだ。のつびきな
らない状況を「西日射す」が示唆している。「一枚の書き置き
西日射す机上」としたときの印象のちがいを探ってみよう。

無頼派をまだ恋しくて桜桃忌 竹内万美

「桜桃忌」は太宰治の忌日で六月十九日。「太宰忌」とも呼
ばれる。太宰治は新戯作派、無頼派と称され、小説に「走れ
メロス」「斜陽」「人間失格」などを残している。未だに太宰
の小説を十遍となく読み返していることだろう。

初河鹿谷の静寂にこだまして 鈴木香音子

溪流に棲む「河鹿蛙」の美声は郷愁を誘う。静まり返った
谷は昼間でもうす暗く、もの寂しい。それをうち破るかに、
雄の河鹿が淡淡と鳴いている。狭い谷に求愛の声が「こだま
して」、雌の河鹿にも聞こえているにちがいない。

梅雨の星ゲリラ豪雨の去りし夜半 糸井しるく

近年は災いをもたらす「ゲリラ豪雨」に見舞われることが
多くなった。梅雨の時期、線状降水帯なる語が頻繁に叫ばれ
る。豪雨の去ったあとの星空に信じ難い驚きをかかせない。

俳誌望見 梅澤佐江

〔駒草〕 令和四年七月号 通巻一〇五六号

主宰 西山 睦 発行所 神奈川県川崎市

昭和七年一〇月、阿部みどり女が東京で創刊。師系高浜虚子。有季定型、写生を基本とし、心を溶けこませた真実を詠む。〔月刊〕

主宰吟「葡萄若葉」一二句より

林中を行くしばらくは著莪明り

林に入ると両脇に可憐な著莪の花の咲き群れる小径が続いている。薄暗い林の中で白いカーペットが敷かれているかのようである。風が吹く度にひらひらと舞う蝶のようにも見えらる。少しの間、著莪明りの散策を楽しみましょうか。

乳を欲る声を抱ける白日傘

乳児を育てた経験があれば、お乳を欲しいのか眠いのか泣き方で解るものである。抱っこ帯で抱かれている赤ちゃんは唇を震わせて泣き続けている。省略の効いた「声を抱ける」に、早く涼しい処に入りお乳を飲ませたい母親の気持が痛い程伝わって来る。白日傘の中の母子を優しく労る行き摩りの作者である。

見つむれば気配のありぬ蟻地獄

蟻地獄とはウスバカゲロウの幼虫。乾いた砂地に播鉢形の穴を掘って中に潜み、じっと獲物が落ちて来るのを待つ。しかし、一ヶ月も捕食出来ない事もあるようだ。巢を凝視していると、穴の底が一瞬動いた気がして、その存在を目の当りにし、生への明暗、執念と孤独とを洞察されている。

夜をこめて葡萄若葉の噴く樹液
一年のうちで新芽が出揃う迄の二週間だけ、未だ夜の明けきらないうちに、若葉の葉先や葉の根元に透明な粒が付着するが、この水滴が樹液である。葡萄農園では代々「幻の美肌水」と呼び女性達は挙って顔や手に塗っていたそう。葡萄若葉の萌え出づる生命力に感嘆頻りの作者。「夜をこめて」の古語の措辞が清少納言の和歌を想起させ格調高い。

かつて覇を競ひしデインギー茅花野に

デインギーとはキャンビンを持たないマスト一本の小型ヨットとある。この場合は一人又は二人乗りのセーリング・デインギーだろうか。茅花の咲き誇る野に捨て置かれてある。インカレから社会人となつてからも常に雌雄を決していたであろう、エネルギーシユだった嘗ての青年は今どうしているのだろうか。青春の象徴としてのデインギーから、自身の青年期のエピソードを追想されたのではないだろうか。

駒草集 同人作品 二七名 各五句より

見ぬ桜見えぬ桜や花曇り 蓬田紀枝子

一瞬の黄を初蝶と思ひけり 寺島ただし

光陰集一 同人作品 二八名 各四句より

人混みの膨らんである桜かな 長谷川かよ子

傘の手にささやかな暖春の雨 清水恵美子

光陰集二 同人作品 二八名 各四句より

うぐひすの空おほどかに谷戸の昼 須田節子

その中の二畳の棚田花辛夷 三宅 糸

四季 主宰選 一九七名 各四句より

満ち潮は河口を掀げ蘆若葉 水谷啓子

花吹雪渦を太らせ迫り来る 関口暉子

佳句に触れ、客観的に情景を写生する様に表現しつつ、その奥にある感情を溶け込ませて詠む事を学ばせて頂いた。

句集喝采

近藤徹平

◆工藤 進「羽化」

飯塚書店

著者略歴 昭和二十八年北海道室蘭市生。平成十四年「沖」入会。同二十年「沖」退会、「河」入会。同二十六年「くぢら俳句会」創刊編集長、句集『ロザリオ祭』既刊。現在「くぢら俳句会」副主宰。

中尾公彦「くぢら」主宰は跋に著者とは二つの結社で俳句を研磨し「心に響く言葉で心に届く俳句」を理念に結社「くぢら」を創刊した同志と記す。著者は「あとがき」に近年の震災や疫病に出会う度に命とはを考えさせられて俳句の存在意義を痛感して、句歴二十年を節目に本句集を上梓と記す。

シャンパンの銀河に昇る絹の泡
人恋へば止まらぬ寅のかざぐるま
マリーナの五月の風に帆を張れり
討入の数に足らねどくぢら発つ
生も死もこの樹と決めて蟬の羽化
春はあけぼのくぢらの海の七大陸
窓側の大人いちまい銀河まで

第一句、シャンパンと宇宙の取合せ、著者はソムリエとチーズマスターの資格者と跋に記す。第二句、寅さん俳句大賞（金子兜太特選）受賞句。第三句、葉山マリーナの世界ヨット選手権でのアシスト体験から生まれた句。第四句、くぢら創刊時の覚悟の句。第五句、結社運営へ覚悟の句集標題句。第六句、合同句集を刊行し、くぢら誌も百号を迎える。春はあけぼのの季語により希望と未来の洋洋たる様が伝わる。

◆寺内由美「母の文箱」

本阿弥書店

著者略歴 昭和十四年愛知県豊橋市生。平成二十三年「好日」入会。長峰竹芳・高橋健文に師事。同二十九年青雲賞受賞。令和三年好日賞受賞。現代俳句協会会員。

高橋健文「好日」主宰は序に、著者は高校生の子のPTA活動時の仲間から誘われた縁で俳句に入門したと記す。

三万日ほどの人生沙羅の花
励ましは母の百歳おほでまり
人間は直立二足月今宵
枯葉舞ふカフカの家は休館日
花氷美人のフェイスガードかな
琉金の尾鰭ゆらりと聞き上手
七夕や母の文箱の短冊紙
柿若葉母の位牌に妙の文字
ほろ酔ひの夫の詩吟や年つまる

第一句、三万日は約八十二歳。第二句、著者は母堂の介護に沼津迄通ったとのこと。第三句、直立二足は造物主の最高傑作。第四句、海外旅行にも深い専門性。第五句、コロナ禍が俳句に入り込む時代到来。第六句、琉金が聞いていてくれる。第七句、母堂を詠んだ句が多いがその中から句集の標題句。第八句、大往生をされた母堂への賛歌。第九句、夫君を詠んだ句が巻末近くに登場、互いの趣味を尊重し和氣藹々。

網野月を選

山紫集

放課後のダンクシュートや虫鬼灯

野田静香

鬼灯の明かりが照らす位牌文字

熊倉千重子

だんまりて子ら鬼灯をほぐすなり

斎藤みよ

朽ち果てる摘まれぬ小さき鬼灯よ

奥山粉雪

—以上特選

鬼灯や遺影の父母は親子ほど

荒井俱子

仏壇の鬼灯怖しとふ幼

加藤でん治

鬼灯が魔除けの如き人の波

川村 治

縁日の鬼灯を買ふ下駄の音

木村るみ子

鬼灯を標に里へ新仏

反町 修

あかつきに鬼灯二つ赤らんで

河野はるみ

鬼灯の一際朱き兵の墓

森本早苗

鬼灯を鳴らす笑顔のお裾分け

小駒さち子

鬼灯や遺影の父母はつづ鮎派

本橋稀香

鬼灯や母の代りと言ひし姉

越田栄子

鬼灯の綱目の中の宇宙かな

梅澤輝翠

世渡りが下手で鬼灯良き音色

後藤綾子

鬼灯や赤き表記の「陽性です」	小林京子	鬼灯鳴らす昔と同じ赤き音	鈴木玲子
鬼灯や星屑潜む小宇宙	近藤徹平	ほほづきを含めば巡る昭和かな	諏訪サヨ子
鬼灯の種出す指ははりつめて	榊原聰子	縁側にはほづき遊び路地の午後	関谷多美子
鬼灯を鳴らし八十路も達者なり	笹本啓子	鬼灯を鴨居に挿して火宅の家	瀬戸雄二郎
鬼灯を鳴らし渡るや青信号	佐藤克之	鬼灯を鳴らす少年阿弥陀帽	染谷正信
野のほとり鬼灯重くみづみづし	篠崎紀子	鬼灯を鳴らす姉妹の真顔かな	高島寛治
あら不思議ほほづきの鳴る皷の口	渋谷さいち	唇に記憶のありし鬼灯よ	高橋満耶子
主なき庭の鬼灯色づけり	下川光子	鬼灯やをさまる癩の顔優し	武田重子
鉢に入る鬼灯街に馴染みをり	菅原卓郎	縁日で海酸漿を姉が買ひ	田中章嘉
お留守番鬼灯鳴らしまた鳴らし	菅原真理	鬼灯に被水は非ず健康児	鳥羽和風
鬼灯や熟るるを待つも青惜しむ	杉浦理恵	鬼灯や今も昔も不器用で	飛永 鼓
朱鬼灯揉むが迂り破れけり	鈴木藻好	お供へに庭の鬼灯一つ添へ	外村紀子

ほほづきのギューと鳴る音舌の上	仲田利子	鬼灯鳴らし母となる身の幼顔	藤澤喜久
鬼灯や言葉の綾に胸躍る	南條きわゑ	鬼灯や農の実家へUターン	保坂翔太
てのひらの鬼灯じつとみる八十路	西幅公子	鬼灯のどこかに疵のある軽さ	曲淵徹雄
鬼灯を鳴らす舌先忘れけり	野口和子	鬼灯を鳴らせぬ吾子の意気地かな	正木萬蝶
青鬼灯変身願ひ夕日の中	野平美紗子	ほほづきを優しく鳴らす姉二人	町野広子
鬼灯の苦し種出し吹き鳴らす	野村美子	鬼灯の舌先苦きまま夕餉	松井由紀子
鬼灯をうまく鳴らす子アイドルに	畑宮栄子	鬼灯や幽霊話の円朝墓	丸山マスキ
ほほづきの姉様人形角隠し	原田秀子	鬼灯やままごと遊びの出番待つ	宮崎紫水
鬼灯を鳴らす笑顔の母がをり	樋口元美	鬼灯の点る仏殿代々の里	宮崎チアキ
鬼灯や初めて紅を塗りし頃	日高道を	鬼灯や顔知らねども兄想ふ	村杉清吉
鬼灯や母の迎へを待つ姉妹	檜鼻ことは	鬼灯や静脈灯る夜更けかな	元田亮一
向う三軒鉢ほほづきの色づきぬ	福田千春	鬼灯の期待はづれにぶいと鳴る	森 和子

かそけくも鬼灯の鳴る児の吐息	森川義子	色即是空網の目だけの鬼灯よ	飯田忠男
竹笹に鬼灯飾り棚完了	森下美智枝	鬼灯のてるてる坊主あすは晴	池田珪子
鬼灯を活ける華道部男子校	森美枝子	いたましや虫鬼灯の透くる朱	池田雅夫
鬼灯の丸さがうれし指で揉む	山田美佐尾	鬼灯の青に恋して赤を愛で	石田慶子
鬼灯や祖母は鳴らせり軽々と	山中いちい	ほほづきを鳴らせず仲間はずれなり	石川理恵
鬼灯や兵児帯しめて下駄はいて	湯浅和	鬼灯の網目の中の日暮れかな	井上燈女
鬼灯のいよいよ赤く雨の庭	横山君夫	鬼灯を抱へて祈る浅草寺	井上玲子
恥ぢらひの頬の色艶実鬼灯	青木鶴城	鬼灯の鳴るまで続く変な顔	井口俊晴
ジャムになす鬼灯は舌裏切らず	秋谷風舎	酸漿の意外な蔭に朱を灯し	上戸千津子
鬼灯を鳴らし媼の自慢顔	新曆文	鬼灯や庭のどこかに落とし穴	内田恵子
鬼灯の照らす道中父祖はるか	阿部幸代	差し上ぐる虫鬼灯のペンダント	梅澤佐江
鬼灯を鳴らす女の薄情け	新井孝磨	鬼灯の音は未知数おちよほ口	大塚茂子

鬼灯を夕日もろとも摘みにけり

大場順子

鬼灯を競ひ鳴らした姉妹寄り

岡田宣子

山紫集作品評

網野月を

鬼灯や遺影の父母は親子ほど 荒井俱子

早世されたのはお父様だったのか、もしくはお母様だったのかも。連れ合いはその後、子供たちを育てて長寿を全うされたものとお見受けしました。もしかしたら戦争を体験されたご両親ということであったのかも知れない。その点についての詳細は句の情報からは読めない。

句は淡淡と写真の父母の歳の差のみを叙述しながら、その背景にある余りにも多くの事を引き出して、内容の濃さも幅の広さも感じさせる句である。

鬼灯が魔除けの如き人の波 川村 治

「鬼灯」の文字が活きている。つまり中七の「魔除け」と対応しているということである。景の結びづらさを伴って

るのだが、筆者は人波が「鬼灯」の植え込みに沿って動いている、と解釈した。筆者の解釈は誤釈かも知れないが、一句仕立てとなっている分、多様な読みが成立する句なのである。それはさて置き、この「鬼」は悪鬼では無いだろう。

鬼灯を標に里へ新仏 反町 修

「鬼灯」は盆の飾りつけに用いたりする。「新仏」なら尚更、仏の好きだった花や実を供えて悼むのであろう。筆者の実家でも嘗て、玄関口から庭に通じる個所に鬼灯が例年のように生えて花咲き実を結んでいた。砂場の手前であつて子供心に綺麗な実であると思つていたものである。座五の「新仏」には作者の鮮烈な記憶があるのであろう。中七の「標に里へ」の後の省略が句に込めた思いを層倍にしている。

鬼灯の一際朱き兵の墓 森本早苗

切り花として供花であるのか、墓所に植えられているのかは分からないが、「鬼灯の一際朱き」と作者には見えたのである。共同墓地も考えられるし、個人の墓、家累代の墓などいろいろ想像されるが、兵として時を過ごした方が眠っている墓なのである。この句の大切なことは「一際朱」く見た作者の心境である。現実として「一際朱」いではなく、作者の心の鏡としての見え方なのであろうと考える。

鬼灯や遺影の父母はつづ館派 本橋稀香

「鬼灯」を供花としてご両親へ供えたのであるが、供花と共にご両親の好きであった「つぶ館」のおはぎも供えたということがある。結局、作者自身も「つぶ館派」であり、供えた後に自ら食すのである。筆者はおはぎに断定してしまつたが、表面に館が露出していて、つぶ館かこし館かが見た目に判明する必要があると勘案したからである。

鬼灯の網目の中の宇宙かな 梅澤輝翠

「鬼灯」の実際の罍の葉脈のことを叙述しているのである。いわゆる虫鬼灯であろうと解釈した。つまり「網目の中」に「鬼灯」の実が納められているのである。その網目籠の中を「宇宙」と見立てている。その空間は閉じられている空間である。「宇宙」と言っても大宇宙に拡散している世界ではないのである。閉じられたいわゆる小宇宙である。何と可愛らしく精巧に出来上がったミクロコスモスであろうか。

放課後のダンクシュートや虫鬼灯 野田静香

座五の季語「虫鬼灯」からバスケットボールを惹起したのである。「虫鬼灯」は何とも奇妙な自然界の現象と言わざるを得ない。そして、自然の創り出した非常に美しい籠である。作者は時折、スポーツのテーマから作句されているようだ。そうなる何を見てもスポーツの何かに見えて来るものだろうか。中七に切れ字「……や」を使用していて、「虫鬼灯」が眼前にあることを確定している。

鬼灯の明りが照らす位牌文字 熊倉千重子

「鬼灯」を秋彼岸の供花とすることが多い様だ。「鬼灯」はそれだけでも明るさを伴っているもので、中七の「明り」は「花明り」に通じる「明り」の捉え方として解釈しても良いであろう。また、鬼灯の罍袋の部分だけを使用して、中に豆電球などを設えて、灯しとする工夫があるようだ。筆者は自称「金魚さん」から、手工芸の鬼灯の灯しを頂戴したことがある。この明りは極めて自然光に近いと思われて、「位牌文字」の微妙な光度を演出するのに最適なように思われる。句は一句仕立てになっていて、座五の「位牌文字」が主体として叙述されている。

だんまりて子ら鬼灯をほぐすなり 斎藤みよ

歌舞伎では「だんまり」という演出技法があるのだが、この景は文字通り、黙り込んでの子らの所作なのである。つまり真剣に取り組んでいるということなのだ。子供は遊びに没頭し、一心不乱に熱中するものである。作者は慈悲の心で子供たちを見守っている。

朽ち果てる摘まれぬ小さき鬼灯よ 奥山粉雪

弱者の目線に独特な感性を発揮する作者である。「朽ち果てる」「摘まれぬ」「小さき」の三つまでも修飾を取って重ねて見捨てられた「鬼灯」へ思いを寄せているのである。がしかし、作者としてはこれでも物足りないのかも知れない。

大村節代 選

鼓
笛
集

大ぶりのな婆のぼた餅入彼岸
京豆腐よく売れる日よ夕薄暑
夏の海全力で立つ発電機

池田珪子

秋の空紙飛行機の単独行
鯛雲乗り鉄の手のコップ酒
山車の灯よ音遠ざかる蔵の街

村杉清吉

浅鉢に蕎麦の花さく村役場
珍客のしめは薫りの零余子飯
自在鉤あやつる宿のきのこ汁

渋谷きいち

刈り終へて星と語らふ案山子かな
名月に一票入れて桂浜
海の宿笑顔迎へる赤とんぼ

新 曆文

千曲川林檎果汁を飲み比べ
滝道の傾ぐ土産屋蝮酒
受験子と友に良夜の露天風呂

本橋 稀香

兎かなさうとも見ゆる月今宵
添へなれど何故か目がゆく吾亦紅
望郷や姉より届く黒葡萄

斎藤 みよ

木漏れ日に水引の花色めけり
揺れ映る水引草や池の端
かな女句碑に銀杏一つ添へてをり

奥山 粉雪

限界の村の外れの捨案山子
言はれても未だ馴染めぬ敬老日
天高し夫婦そろひの万歩計

菅原 卓郎

谷風に揺るる芒や富士の山
萩の風谷間の沼を吹きすさぶ
パノラマの空中散歩もみぢ谷

木村るみ子

名月の耀き心洗ふやう
名月とジュピターきらり今宵の宴
縁先より考に習ひし天の川

関谷多美子

みちのくの銀山跡や女郎花
落鮎やいつまで酌んで釣談義
方言の飛び交ふ宿やとろろ汁

佐々木史女

鳥さはぐ樹下にひつそり螢草
真紅燃ゆカンナに力もらひけり
すすき野の広がる空に母の影

山岸久美子

かな女墓の夫婦の句碑や秋彼岸
氣象神社秋晴願ひ手を合はず
外車ドライブ天井開き星月夜

森下美智枝

そぞろ寒床屋剃刀研ぎ顎の下
靴磨く妻に頭下がる秋しぐれ
新米に頬のふくらむ子の笑顔

安倍弘夫

なにかあるホバリングする鬼蜻蜒
敗荷や一輪残るアウトロー
祝ひ事無くも可憐に水引草

飯田忠男

千年も百年も生き猫じやらし
淋しさは二人でゐても秋の暮
夜学の灯守る一途に老教師

佐藤克之

☆

☆

夜の秋の雨音高し本開く
虫の夜いつか眠りに入りにけり
齡早七十五歳敬老日

高原和子

鼓笛集作品評

大村節代

大ぶりのな婆のぼた餅入彼岸

池田瑠子

春はぼた餅（牡丹の花）、秋はおはぎ（萩の花）と言われる。しかし大ぶりのな婆のおはぎでは実感がわかない。和菓子屋で買う「おはぎ」は一年中上品な形で萩の花だが、婆の作るのには「ぼた餅」大きくて、餡もたっぷりなので、こちらは一年中ぼた餅が似合う。掲句の季語入彼岸は春の季語故、ぼた餅にぴったり合う。

秋の空紙飛行機の単独行

村杉清吉

子供のころ、紙飛行機を作って、飛行距離を自慢しあった思い出は多くの人が持っているであろう。ちなみにギネス記録の飛行距離は六九・一四m、滞空時間は二九・二秒。この記録を抜こうと、多勢の人が、折り方や飛ばし方を工夫研究しているという。掲句の紙飛行機は、秋の青空に悠々と飛ぶ。他の紙飛行機が墜落しても、一機になっても動じない。青空と紙飛行機の取合せが、美しく、目に浮かぶ。

鼓笛集巻頭（十月号）

私の好きな一句（自句自解）

反町修

靈園のみみぢの光泉下へも

さいたま市営靈園「思い出の里」には、桜、櫟、銀杏などの落葉樹が植栽されている。秋には、紅葉や黄葉が美しく光を放つ。靈園が最も華やかな時季である。この光は此の世ばかりではなく、彼の世にも届いているかのように思われ、敬虔な気持ちになる。

紅葉と黄葉の両方の意味を持たせるために「もみぢ」と平仮名書きにした。

浅鉢に蕎麦の花さく村役場
自在鉤あやつる宿のきのこ汁

渋谷きいち

旅行支援がはじまって、新聞にも色々な広告が出ている。蟹や松茸、各地の名物や名産が誘う。しかし、そんな豪華な旅でなくて良い。野の花や蕎麦の花を愛で、旅籠屋風の宿の心暖まる持て成しにほっこりする。

二句、三句の順序を入れ替えると、心情が尚伝わると思うが如何。

いかがですか

「俳句日めくりカレンダー」

令和五年の「俳句日めくりカレンダー」の三六五句の中に、また鬼之介の句が選ばれました。掲載句は、五月十八日の「葉柳やむかし銀座に点灯夫」です。明治時代に銀座の街を照らしていた瓦斯燈を点す仕事に従事していた点灯夫に思いを馳せての俳句です。

点灯夫



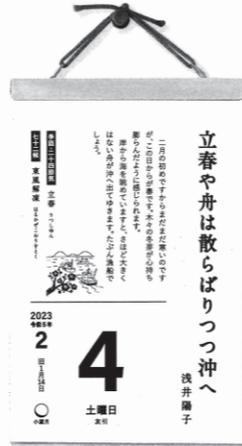
*この画像は、カレンダーにはありません。

宇多喜代子氏を選出された三六五句と、その一句一句に付けられた解説が大いに役立つと思います。よろしければ、直接新日本カレンダー（株）電話06(6971)4480へご注文ください。

主宰 山本鬼之介

俳句の日めくり カレンダー

2023
令和5年



立春や舟は散らばりつつ沖へ
洗井 蘭子
二月の節分や舟は散らばりつつ沖へ
洗井 蘭子
はなはなと舟は散らばりつつ沖へ
洗井 蘭子
はなはなと舟は散らばりつつ沖へ
洗井 蘭子
2023
4
土曜日
2,000円
(税込2,200円)

※在庫数に限りがあるため、品切れになる場合がございます。

一日一句、365句を掲載。

江戸時代や明治の句も、現代の句も幅広く掲載。

宇多喜代子氏の解説付き。

すべての引用句に、宇多喜代子氏の解説付き。

作句に役立つ「歴」の情報。

季語、口唇、節句や行事などの情報も掲載。

送料無料！一冊からでも。

まとめ買い割引もあり
ますので検討下さい。

資料をご希望の方は、下記へご請求ください。



新日本カレンダー株式会社

〒537-0025
大阪市東成区中道3丁目8番11号

TEL.06-6971-4480
FAX.06-6972-5885

水明の記事掲載他誌より転載

『俳壇』

九月号

◆大特集

結社主宰101人競詠

好きな植物を詠む

山本鬼之介(水明)

〔昭和五年九月創刊〕

小橋わたれば

今もなほ渡しの際に花薺

陣を敷く糺の森の梅雨茸

抜手切るごとく芒の原をゆく

大根の辛み貴し朝御飯

楪や屋敷の前に木の小橋

特集 わからない句をどう読むか

特別企画 おくのほそ道333年、その地に遊ぶ(後篇)

巻頭作品10句

大木あまり・佐藤郁良・鈴木しげを

鈴木直充・高木璵子・西嶋あさ子

星永文夫・矢島 恵

俳壇

12月号

11月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
中村雅樹

八木健道 滑稽俳壇

四季巡詠33句 第Ⅲ期：松尾隆信・長嶺千晶

色の歳時記……………長谷川 榎

俳句文法 そのがポイント……………井上泰至

俳句史を見直す……………秋尾 敏

ものがたりのある俳句……………四ツ谷 龍

先人のことば……………和田華凜

十二か月添削教室……………小林貴子

俳句と随想12か月 河原地英武・長島衣伊子

本阿弥書店

〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

『俳句四季』 九月号

俳号の履歴書

2022年 7月 10日 現在



ふりがな	やま もと き の すけ		
氏名 (俳号)	山本 鬼之介		
生年月日	1938年 10月 1日 生	(満 83歳)	本名 山本 弘

年	月	句歴 (項目別にまとめて記入)
1971	6	「水明俳句会」に入会
1973	10	「酒の会」に入会
2014	4	「水明俳句会」副主宰に就任
2018	11	「水明俳句会」第五代主宰を継承

俳号を決めた動機

1971年6月、水明俳句会に入会し、父・山本謙迷から「飛騨子」の俳号をもらった。しかし、句会で名指をあげると発音が本名の「弘」と同じで、字画が多くて書くのも面倒であり、馴染めなかった。この辺り、私の心情を兄・山本紫黄が見抜いており、父の死後、ほとんどなくして俳号を改めることになった。1973年3月某日夜、居酒屋で紫黄と酒を酌み交わし、フツ新たな俳号について語り合った。「紅白」とか「せえ介」など、十指に余る候補名が挙ったが、結局自分が最も気に入った「之介」の二文字を生かし、その頭に元・俳誌「断崖」主宰西東三鬼の「鬼」の字を勝手に頂戴して「鬼之介」が誕生した。「断崖」の同人であった紫黄も喜び、以来50年余に亘りこの俳号を私の分身として俳句人生を歩んで来た。「鬼之介」の存在が無ければ無味乾燥の人生であったろう。

私の俳句の長所・短所

人間探求の鬼之介流俳句により、類句・類想句が発生しにくい。
花鳥詠詠俳句には興味が薄い。

趣味・特技

サイクリング (学生時代は自転車競技も行ってた)

本人希望記入欄

「鬼之介」の「介」の字を「助」と誤記されることが時々あるので、
ご注意ください。

りんどう忌の記



安倍元総理の国葬が執り行われた九月二十七日に第五十三回りんどう忌が浦和コミユニティーに於いて修された。

昨年とほぼ同じ人数の四十名が出席、兼題「りんどう忌・かな女忌」「秋の水」の二句を投句して互選が行われた。

会場には、かな女師のお人柄が偲ばれる温かな遺影が置かれ、りんどう他の供えられた花々に爽やかな秋が感じられた。

網野月を幹事長（事業部長）の開会挨拶の後、かな女師への黙祷を捧げ、山本鬼之介主宰の挨拶を頂き句会へと移った。（投句総数八十句、互選五句選、季音雪欄作家十句選）

長寿のお祝

今年喜寿を迎えられた梅澤輝翠、大塚茂子、奥山粉雪、熊倉千重子、反町修、保坂翔太の各氏に主宰より夫々の名前が詠み込まれた句が書かれた卓上屏風が贈られた。

翠巒や光輝あまねく越の梅
鬼之介
うなじへと春の粉雪さらら坂
〃
子宝を乗せ重陽の千歳鳥
〃
修学院離宮の庭や初紅葉
〃



祝ご長寿
主宰より喜寿のお祝いを頂いて

太棹に応へ飛翔の鶴の声
鬼之介
披講
保坂翔太氏、曲淵徹雄氏
主宰詠
蔵元に今こんこんと秋の水
打ち明けてみたくなる人りんどう忌

主宰選

天

流れ藻に夕日の翳り秋の水

喜恵

地

「暴れ天竜」諏訪湖が放つ秋の水

昇

人

「雨月抄」思ひあらたにかな女の忌

水尾

天・地・人 色紙授与

秋の水彫りくつきりとかな女句碑

節代

川添ひの黒塀長し秋の水

かつ子

句碑洗ふ真白きタオルかな女の忌

翔太

忍城の歴史を今に秋の水

栄子

二藍の衣まとひ初むりんどう忌

由紀子

秋の水奈良墨匂ふ臨書かな

マスマ

鯉の回遊色を連ねて水の秋

千重子

——以上超特選

短冊授与

秋水の光をまとひ巫女の舞

順子

竜胆に極まる碧やかな女の忌

徹雄

黄楊柳のつや亜麻色にかな女の忌

和葉

溪流の石の色透く秋の水

宣子

——以上特選

水晶のしづく松葉に秋の水

久美子

残照の金閣映す秋の水

水尾

秋の水涙の顔は映さない

月を

ふるさとの水のやさしやりんどう忌

はるみ

堰落つる音清と秋の水

徹雄

水の秋空を見上ぐる芭蕉像

和葉

竹箒立てられてをり竜胆忌

道を

水の秋木曾路は今も山の中

昇

満帆の日本丸よ水の中

正信

九十年の誉れを此処にかな女の忌

喜恵

日本橋くぐりて翳る秋の水

ひろこ

師の見つむる百周年へかな女の忌

宣子

瀬の音のさはさはさはと秋の水

きいち

顔すすぐ一夜で変はる秋の水

治子

秋の水王冠キラと沈みゆく

まりこ

水明の未来図灯すかな女の忌

静香

形見の帯をきりりと締めむかな女の忌

理恵

手押し井戸かな女の墓に秋の水

公子

秋の水ダム湖祭の太鼓

徹平

少年の水切り止まず秋の川

輝翠

句碑のぞむ石兔の池に秋の水

俊晴

水の秋クリアファイルにかな女の句

栄子

東男の行く手を阻む秋の水

節代

大鯉の色艶増せり秋の水

翔太

秋水や水車の溢す音ゆたか

茂子

脈々と続く詩心かな女の忌

修

むらさきの供華匂ひ立つかな女の忌

かつ子

面影や屈みてのぞく秋の水

順子

一筋の野溝に光秋の水

由紀子

日本橋の気つ風ゆかしきりんどう忌

マスマ

木道の軽やかな音秋の水

章嘉

蔓の先辿ればつるにかな女の忌

珪子

野菊活け偲ぶ温顔かな女の忌

玲子

ひとつづつ手放して来し秋の水

京子

新しき息吹脈々かな女の忌

チアキ

日を連れてカラカラ流る秋の水

粉雪

酒蔵に助つ人の声水の秋

義子

やさしさに秘めし気骨よかな女の忌

千重子

水の秋断捨離の手のためらはず

鶴城

高得点者の発表と商品授与

一位 石井喜恵 二位 五明 昇

三位 近藤徹平 四位 保坂翔太

五位 矢作水尾 六位 丸山マスマ

七位 西幅公子 八位 星野和葉

主宰の全句に亘る講評を頂いた後、大村節代編集長の閉会の辞を以って無事終了した。各受賞の皆様おめでとうございました。

水明例会

第一例会（浦和）

境延昭
茂木和子 報

架をはさみ窓の月見る夜長かな
海坂藩の路地に歩を置く夜長かな
長き夜や言葉少なき人と居り
扶まれし玻璃戸の虫の夜長かな
酔漢二人袋小路の長き夜
愚痴話の切りどきはづす夜長かな
ただよふかに白衣観音夜長の星
手紙三通やつと物にす夜長かな
看取りとは優しき言葉長き夜
腰痛を宥めになだめ秋桜
淳一の「失業園」を読む夜長
長き夜や投句あれこれ選びかね
長き夜のため息つつむ静寂かな
夜長し見知らぬ顔が定席に

順子
マスミ
節代
稀香
延昭
由紀子
以上特選
治子
和葉
喜恵
チアキ
徹平
由紀子
亮一
延昭

第二例会（東京）

青木鶴城報

夜長し百鬼夜行の出番なり
痛飲しスマホ忘るる秋の夜
晩学の歳時記愉し夜長かな
宗教談議結論のなき夜長

休耕田つづく畦道彼岸花
蒼天の続きに戦火曼珠沙華
この辺じや見ない顔だね秋扇
余所者の如下町の曼珠沙華
秋扇どつこい生きてる片隅で
秋の雲われ寂寥を味はへり
秋扇閉ちては開き人を待つ
唐棧の袋に納む秋扇
バス停に人待ち顔の彼岸花
石洗ひ香煙の中彼岸花

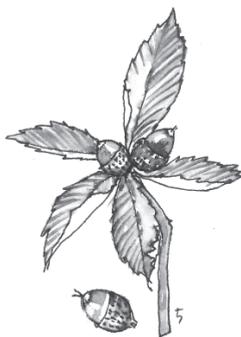
マスミ
節代
稀香
和子
道子
士史
峰雄
利子
以上特選
米子
敏江
みどり
弘子
則子

第三例会（東京）

五明徹雄昇 報

日の下に棚田彩る曼珠沙華
散步道今朝突然に彼岸花
紅の個性強か曼珠沙華
旅立ちし友の描きし秋扇
彼岸花我此処にあり路地の奥
銃声の途絶えぬ星よ曼珠沙華

登高や李杜の詩集をふところに
登高や松美しき鳥数ふ
登高や来し方はみな雲の中
虫の闇内緒話の熱き息
提灯の尻も小躍り踊唄
捨てられぬ夢一つ持ち登高す
秋の雲「風信帖」の筆遣ひ
登高や砦に遣る狼煙台
大場順子
理恵
萬蝶
徹雄
昇
以上特選



いみじくも高きに登る古マンション
 秋蝶の湖のり追ひ越す化粧坂
 白根山のゆりの碧恋ひ登高す
 登高や天を背負ひて無礼講
 来し方に影ある女医や夜半の秋
 九十を謝して高きに登りけり
 登高や村一望の円丘地
 登高のビルに朗々寮歌祭

第四例会 (浦和)

我に向く緋の鶏頭花獣めく
 戦への怒りふつつ鶏頭花
 末席も心地よき風秋簾
 飛び石や雨粒含む鶏頭花
 曲り家の苦屋に掛かる秋簾
 秋簾巻きて風よぶ蕎麦処
 残照を透かして昏し秋簾
 曼陀羅の朱の色重き鶏頭花

境 延昭
 石井喜恵報

喜久 鶏頭のはげしき赤に目くるめく
 徹雄 秋簾問はず語りに初恋を
 大場順子 鶏頭や妖しく誘ふフラメンコ
 理恵 秋すだれ今更出来ぬ隠しごと
 萬蝶 鶏頭花出で湯の街に燃え立ちて
 康世 競走馬の強き首筋鶏頭花
 雅夫 山荘に残る揺り椅子秋簾

第五例会 (浦和)

黒黒と切り立つ古城夕月夜
 山並は眉引くごとし夕月夜
 朝の陽に水色淡き思草
 繩のれん潜る頭上に夕月夜
 うつむきて誰を慕ふや思草
 ふるさとの山は寝釈迦か夕月夜
 おもひ草貝紫の夕ぐれ来
 後朝の別れにも似て夕月夜

梅澤佐江報
 河野はるみ

玲子 鶏頭のはげしき赤に目くるめく
 翔太 秋簾問はず語りに初恋を
 曆文 鶏頭や妖しく誘ふフラメンコ
 延昭 秋すだれ今更出来ぬ隠しごと
 寛治 鶏頭花出で湯の街に燃え立ちて
 恵子 競走馬の強き首筋鶏頭花
 喜恵 山荘に残る揺り椅子秋簾

若松例会 (京橋)

うつむきてゆかしき乙女思草
 正木萬蝶
 石田慶子報
 鬼灯市女社長の歩で抜くる
 秋澄むや急登の息頂へ
 片恋の君とほほづき神社裏
 暗くなるまでくちゆくちやぶうぶ鬼灯を
 二枝の鬼灯生けて鄙の宿
 虫鬼灯夕日の色に極まれり
 秋気澄む命葉でふ鳥言葉
 虫の闇沓脱ぎ石に下駄二足
 蠅螂の恋は中々命懸け
 乙女ごころや青酸漿にある愁ひ
 師の忌待ち鬼灯に灯のともりそむ
 前世の記憶ありあり花野中
 鬼灯を含むルージユの独り言
 鬼灯はお手の物よと赤き口
 鬼灯や人は故郷に帰るなり
 鬼灯の鉢をお供に水上バス
 葉脈を残す鬼灯ほのあかり
 天高し中立の身の置き所
 鬼灯をならす乳歯の抜けてをり
 朝顔の真中に夜の名残りかな

以上特選
 佐江 萬蝶
 萬蝶 萬蝶
 佐江 萬蝶
 萬蝶 萬蝶
 以上特選
 佐江 萬蝶
 萬蝶 萬蝶
 以上特選
 佐江 萬蝶
 萬蝶 萬蝶

赤とんぼひしほの町を群れにけり

玲子

ひそやかに名水を汲む十六夜

道子

文豪の旧居を移築法師蟬

和子

弦締めて十六夜の月待つばかり

洋子

十六夜や今日当直と娘のメール

ゆら女

寝そびれて一盞欲しき秋の蛇

早苗

秋の宵オーピングはかの「案山子」

以上特選

ゆら女

寝姿の乱れあらはに稲つるび

洋子

十六夜やぐづる子あやす若夫婦

早苗

又しても脳の誤作動秋暑し

玲子

廃校となれる母校や星月夜

千津子

休耕田の觀光大使秋桜

和子

十六夜のリハビリのチェロ一途なる

道子

転動の子の住む村の芋煮会

千枝子

菊咲月遺影の母とおしゃべりを

千世子

新涼や朝刊の音風のごと

満耶子

学童の力作見入る秋の昼

さわゑ

☆

☆

昔話あれこれ 21

なお続く大長谷王の惨劇

その後、大長谷王は、従弟の市辺忍齒王を誘って、淡海の久多綿の蚊屋野（滋賀県愛知郡秦荘上蚊屋野付近か）に狩に出かけた。

蚊屋野に到着した二人は別々の飯宮を作って宿泊した。

翌朝、まだ日も上らぬうちに、忍齒王は大長谷王の飯宮の傍らに来て馬に乗ったまま何心なく、大長谷王の従者に

「まだお目覚めにならないのかね。『夜はすっかり明けましたよ。早く狩場においてなさい』と申し上げてくれ。』と言って馬を進めて出かけた。従者は

「いやな物言いをなさるお方です。ご用心なさいませ。武装なさいませ。」と申し上げた。

大長谷王は、衣の下に鎧を着け、弓矢

を帯びて、馬に乗り忍齒王に追いつくや射殺した。その上忍齒王の身体を斬って飼葉桶に入れ、忍齒王の存在を永久に消すために盛土にしないで土と同じ高さに埋めた。

忍齒王の遺児の流浪

忍齒王の王子たち意禰（オケ）王・袁禰（ヲケ）王は父王の死を聞き、直ちに逃亡した。

山城の荊羽井に到着して乾飯を食べようとした時、顔に入墨をした老人が乾飯を奪った。そこで二人の王子は

「乾飯は惜しくない。それにしてもお前は何者だ。」と尋ねた。その老人は「私は山城の豚飼いの部の民だ。」と言った。

こうして二王子は逃げて、玖湊婆の川（淀川）を渡り、播磨の国に到達し、その国の住人志自牟の家に入り、身分を隠して使用人となり、馬飼ひ、牛飼ひとして働いた。

（つづく 丸山マスマ）

各地句会



水明小川句会 (小川)

貴船菊満開の日に夫逝けり
秋立つや目立たぬ色の紅をひく
星一つ流れてなほも願ひ事
稲穂垂る三三五五の通学路

光が丘俳句教室 (東京)

台風来旅に進路に迷ひあり
狼藉の限りを尽し野分過ぎ
マイクロボス同じ顔ぶれ秋彼岸
食卓に会話はづむや松茸飯

りそな俳句会 (浦和)

芒原溺るる如く夕雀
芒野の波や光や単線路
秋の夜や馴初め語る恥づかしさ

きよ子 綾子 栄子
みや 綾子 栄子
はる 康子 典子
理恵 文 建治郎

「はさみ菊」手に父偲ぶ秋の夜
芒野を泳ぐ素振りて進みゆく
手のひらに青空に風芝原
字余りの一字を呪ふ秋の夜
先斗町舞子の流し目秋の夜
飛鳥路や記紀の山川花芒

久美子 寛治 京子 道子 勲 マスミ

卓上の異端のかたちラフランス
風に載せ秋の田伝ふ豊穰を
スパーのドル箱席に座る梨
みのり田の中走りゆく列車かな
手に余る梨の量感新種かな
送り主逝きても届く二十世紀
はちきれさうに梨も農家の娘らも

由紀子 多美子 公子 千恵 茂子 美智枝 幸代

芙蓉句会 (浦和)

青空や群れなす短軀赤とんぼ
短命と言はれ八十路やちろる鳴く
秋刀魚焼くきれいに食ぶる夫であり
馬鹿馬鹿し瘦せて短き秋刀魚かな
秋刀魚焼く焦げのにほひも旨さかな
秋刀魚どこ煙に巻かれ煽ぎ見る
孫のよな秋刀魚煙らせ夕の膳

正子 道子 税子 仁 ともこ 美子 文子

外視く貌は強面木樵虫
蓑虫や唯我独尊決め込めり
蓑虫の独りで生くる矜持かな
蓑虫や孤独に耐へて待つ旅路
鬼の子の糸に吊らるる自在かな
父作る強飯弁当運動会
蓑虫鳴く明かせぬままのいじめかな

道吉 清吉 平通 徹雄 正信 鶴城

野菊の会 (与野)

番犬の耳の感度や月今宵
外犬に蚊遣をつくる其処かしこ
新涼や乳母車より犬の顔
小犬放してやればじゃれあて猫じやらし
抱きしむる犬の涙や秋うらら
秋うらら共に暮らしてシニア犬

美代子 和子 清子 まな 知子 光子

若狭水明会 (若狭)
松明の続く野道や送り盆
風鈴やしぼし写経の筆を置く
束の間の惜別なりし送り盆
送り火や前は八人居し家族
線香の淀む川辺の盆送り
「ただいま」の黒い顔待つ冷蔵庫
送り火に妻の塔婆を焼べにけり
うすれゆく昔の慣ひ魂送

鼓 白鷺 保人 初花 寛久 和風 郁子

櫻蔭句会 (浦和)

好物の梨も供物に三回忌
むせるほどの稔田続く里の道

美子 真理

水明熊谷句会 (熊谷)

手鏡にしばし目を遣る敬老日
睦まじく三世代あり敬老日
稲架の影重なり合うて里暮るる
稲掛けて我が故郷の景となる
稲架黄金夕陽に浮かぶ赤城山
敬老日さびしき残る初祝
稲架掛けて子等も楽しや隠れ鬼

俳句の手ほどき (岩槻)

黄昏れてお忍び散歩秋の草
切絵図の切支丹坂秋の声
湾のぞむ砲台跡や秋の草
秋草を活けて三和土の黒光り
ひそやかにまたしたたかに秋の草
揺らぎなき足場の杭や秋の草
切支丹のオラシヨ聴く旅法師蟬
源氏名を呼び合ふ仲居秋の草
思ひ出はバッグにしのお秋の草
色草や天使零せし金平糖
支へ合ひ暮らせし日々や星月夜
分け入れば身の丈を越す秋の草
秋草や古墨にのこる野面積み
ひそやかに咲く露草やいとしけれ
茸狩支流に添ひし獣径

雛の会 (浦和)

枯れ切つて赤さに徹し唐辛子
己が立つ位置はゆづらぬ花芒
稲雀一羽一羽は可愛げに
秋灯書肆にはやばや新刊書
乾く程からくれなるに唐辛子
青葉の会 (浦和)
伊勢湾やかの台風の甦る
台風の怒り狂ひて街を行く
秋の海ポートタワーの眺望よ
展望や花野ひろがり空青し
望遠鏡宇宙を想ふ月の秋
台風に旅のなごりの絵蠟燭
台風禍空家の屋根に影もなく
秋草を雑草と言ふ無粋者
秋草や網代の筒の開けさよ

りんどう俳句会 (浦和)

文に目を伏して見上ぐる流れ星
娘に託す父母の形見や星流る
夜食買ふ町のはづれの販売機
山の端に流星ひとつ落ちにけり
線路工夫どかどかと来て夜食かな
流星数多山間の闇照らすこと
久美子
卓郎
忠男
美子
桂子
幸代
翔太
徹平
義子
水尾
ます美
延昭
佐江
倭子
茂子
正行
青葉の会 (浦和)
伊勢湾やかの台風の甦る
台風の怒り狂ひて街を行く
秋の海ポートタワーの眺望よ
展望や花野ひろがり空青し
望遠鏡宇宙を想ふ月の秋
台風に旅のなごりの絵蠟燭
台風禍空家の屋根に影もなく
秋草を雑草と言ふ無粋者
秋草や網代の筒の開けさよ

燈女
喜恵
輝翠
チアキ
佐江
美紗子
真理
美智枝
公子
美子
啓子
洋子
和子
輝翠
夜食喰ふ灯火の下の頭敷
肥り目の露座の大仏初紅葉
煩惱とうそぶく口の夜食かな
大花火の粉降り来る河川敷
力みあるつくづく法師大擲
星飛んで一瞬透ける平家谷
きざきサークル (浦和)
海峽を繋ぐ漁火十三夜
潮溜り黄金に浮かぶ十三夜
十三夜月から地球眺む日も
松虫やチロリチロリン恋遊び
夕暮れのビルの谷間の十三夜
昼の虫寺に謂れの力石
目を閉ちてすず虫の音によひしれて
虫鳴くや庚申塚は草の中
十三夜木曾の旅籠の円窓窓

芽吹句会 (浦和)

岩肌は柱状節理秋の山
学舎や銀杏黄葉の晴れ姿
気負はずに学ぶ句の道秋澄めり
手に胡桃にぎり都会の風に立つ
秋の山韓紅に燃ゆるなり
手作りの胡桃のチャーム句友より
柚小屋に烟立ちをり秋の山
寛治
君夫
利子
治子
サヨ子
弘夫
弘夫
輝翠
和子
洋子
啓子
美子
公子
美智枝
真理
美紗子
夜食喰ふ灯火の下の頭敷
肥り目の露座の大仏初紅葉
煩惱とうそぶく口の夜食かな
大花火の粉降り来る河川敷
力みあるつくづく法師大擲
星飛んで一瞬透ける平家谷
きざきサークル (浦和)
海峽を繋ぐ漁火十三夜
潮溜り黄金に浮かぶ十三夜
十三夜月から地球眺む日も
松虫やチロリチロリン恋遊び
夕暮れのビルの谷間の十三夜
昼の虫寺に謂れの力石
目を閉ちてすず虫の音によひしれて
虫鳴くや庚申塚は草の中
十三夜木曾の旅籠の円窓窓

昇
和
喜代子
和枝
かつ子
俱子
タイ
啓子
和子
玲子
修
正信
卓郎
紀子
翔太
順子

道
富子
チアキ
ひろこ
千重子
玲子
修
正信
卓郎
紀子
翔太
順子

皇月の会 (浦和)

車椅子より高く伸びたる雁来紅

橋渡り茶屋遊びする西鶴忌

黄鵝頭赤に抗ひ仁王立

パレットに色を思案の鵝頭花

海原や四季ある国の初紅葉

品格を競ふ国花の菊まつり

暮参り裏赤文字の黒御影

句に遊び色に遊ぶや西鶴忌

鶏頭の燃ゆる血潮に通り雨

あゆみの会 (浦和)

穂芒の大白波や空は藍

柿紅葉あやとりの子が縁側に

秋の風水子地蔵の玩具かな

野仏に子が手向けたる草の花

暑い中元氣に遊ぶ近所の子

走る子の帽子芭に見え隠れ

蛸の会 (浦和)

新米やウキウキで鳴る電子音

大店の暗がりに立つ菊の香や

鳥渡るルート知る技謎めきて

渡り鳥降り立つ湖や波光る

娘婿かつく袋や今年米

光代

美佐尾

珪子

順子

紀子

静香

孝磨

曆文

さいち

重子

和

俱子

啓子

山遊

藻好

元美

礼子

さち子

朝香

風舎

新米や八十八の手をつくす
炊きたての新米盛るや秀衡椀

売店のだるま弁当秋の山

新米や湯気に故郷の山の影

入国のビザはお持ちか渡り鳥

新米の出荷見送り安堵せる

和歌山水明句会 (和歌山)

刃物研ぐ顔は山姥虫すだく

敬老日手押し車がわがベンツ

村に一軒茅葺き屋根や秋の雲

秋気澄む微笑む遺影にゆるむ頬

引越しは同じ町内秋桜

無花果の入荷のたびに足運ぶ

巡礼の道案内や秋茜

いりあひの鐘や稲穂の香りたつ

蘭の会 (浦和)

蟾螂のみどりに透けて朝の庭

断崖の鎖持つ手や秋高し

蟾螂やマリオネットの幕が開く

秋高しゆるりと雲の何処へ行く

感けるや氣をとり直す竹の春

秋高し木遣一声谷渡る

相輪に舞ふ白鳩や天高し

立つ鳥の一路平安秋高し

しるく

ひさの

るみ子

月を

鶴城

宣子

和子

道子

千枝子

千世子

満耶子

さわゑ

洋子

迪代

トエ

風舎

珪子

悦子

粉雪

まりこ

隆夫

比早子

踏切を待つ間に一句秋高し
先づ当たる妻の直感秋出水

秋高し背中丸めし老農夫

月の雲人感センサーライトかな

樹林帯抜けて笹原秋高し

ほれほれと怒らせてみる祈り虫

山茶花 (浦和)

句は未完耳を委ぬる虫時雨

二十世紀むきつつ故郷偲びをり

夜遊びを咎むることく虫すだく

豊水の口からはみ出す甘さかな

虫しぐれ坂のぼり行く無言館

鶴川山百合句会 (町田)

抜き足で階段虫の声びたり

星の橋狼の子は乳を飲む

煙草屋にソロの蟋蟀住んでをり

耳栓を抜いて一氣に虫の声

虫鳴き止む野外ロックフェスティバル

付箋だらけの夫の歴史書虫すだく

虫時雨今宵トリオかカルテット

十回鳴き九拍休む鉦叩

ゆふ風や昼の喧騒虫の音に

地蔵の顔ならば曼陀羅虫の秋

夕峰

正信

さよ子

月を

鶴城

京子

マスミ

美江子

光子

清一

綾子

雄二郎

月を

喜久

史代

広子

千春

萬蝶

理恵

美千子

玲子

水明鬼石句会 (鬼石)

はちきれんばかりに太り秋茗荷
虫の夜築百年の家に住み
毬の中艶やかな栗顔を出す
夕陽浴び利根の河原の花野かな
いつまでも生きてるつもり秋刀魚焼く

和子
ナヲ子
洋子
聡子
紀子

樺の会 (浦和)

案山子立つ空の明るさ身に受けて
傾ぎゐる案山子の悲鳴風に消え
パイデンに岸田寄り添ふ案山子かな
雄大な富士に抱かる黍畑
捨案山子いつもの笑顔くもりたり
寅さんの案山子にマスク令和四年
山田の案山子スマホ片手に訪ねたり
車窓より人と見紛ふ遠案山子
もろこしを一本齧り破顔の子
唐黍の粒や思ひ出ほろぼると
もろこしは芯の甘さよませごはん
茹でたての平和の色や玉蜀黍

妙子
朋子
裕誌
彰二
克之
富子
文子
西井
千重子
敦子
亮子
治子

ミモザの会 (横浜)

石仏に泪の跡や雁渡し
廢線の枕木をゆく雁渡し
雁渡し透きとほりゆく空の色

萬蝶
玲子
由美子

秋茜くるくる指とにらめっこ
雁渡し「第九」の誘ひ早届く
バス停を横目に歩く星月夜
酒倉に麴の匂ふ雁渡し
後厄の子は異国にて居待月

水明澤つくし句会 (大阪)

秋の夜の星座新たに雨上り
散歩道夜風に交る秋の声
新涼の誦経響くや花天井
焼栗を下げてかつての山を往く
十五夜をベランダに出て長電話
子規の顔いつも横向きラ・フランス

野ばらの会 (浦和)

野ばらの会 (浦和)
剪定の音に調ふ庭九月
過ぐる季の後ろ姿や九月来る
さあ九月疲れし五感呼び戻す
九月来て母の炊き込み御飯かな
初さんま見様見真似の化粧塩

水明松本句会 (松本)

向日葵はパワー全開空見上ぐ
大口でおにぎり頬張る水遊び
らせん状色とりどりの朝顔よ
リコーダー吹く子の指や青葉風

栄子
慶子
重弥子
史代
千春
智恵子
さりり
美令
人美
洋子
ゆら女

若鮎句会 (浦和)

若鮎句会 (浦和)
良夜なり祝儀袋の墨香る
良夜かな夫黙考の碁石の音
遊園地出でて広がる良夜かな
やや丸き庭師の背中柿紅葉
庭園の隈無く青き良夜かな
石畳に紅き花落つ良夜かな
砂時計をひとまづ横に良夜なる
良夜かな離れたくない指と指
良夜には庭の地蔵も足伸ばし

たかなな俳句会 (川口)

たかなな俳句会 (川口)
待宵や易者静かに未来告ぐ
二学期や夏バテ知らず子等の声
母国語の会話大声響虫
待宵の庭うす墨に静もれり
移ろひや灯火の秋の電子文字
推敲の一字に灯火親しめり
待宵や夢二の描きし人を恋ふ

神戸大池句会 (神戸)

神戸大池句会 (神戸)
秋風にサリーの裾の翻り
葉鶏頭微妙な色や空青し
露店湯の縁に一息赤とんぼ

さなえ
稀香
拓真
亮一
芳春
香音子
月を
鶴城
喜夫
のり子
ふくみ
小麦
義子
鶴城
水尾
静香

玲子
千津子
早苗

花衣の会 (浦和)

花束の溢る葉月の大使館

遠つ淡海霧立ち込めて今日は晴

力あり吹き抜けてゆく野分かな

野分にも泰然自若施設かな

裾乱し野分の道を里帰り

円卓の会 (浦和)

ジェット機が消ゆる山の端鱗雲

中秋や母愛用の文机

あかげらの手に負へぬらし泰山木

露けしやのべつ草食む牧の牛

玻璃弾き早や初時雨伽藍堂

啄木鳥や暗号めけるドアノック

啄木鳥や慢性疲労性鞭打症

秋澄みて百花繚乱熱気球

コクーンシティカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

立ち漕ぎの抜きつ抜かれつ鱗雲

風を抱き踊るカーテン今朝の秋

うたた寝の母の福耳白木槿

万葉の大空かくや鱗雲

鱗雲ボール蹴る子の長き脛

木槿咲く娘嫁ぐ日遠からず

下校の子今日も道草赤まんま

みよ

みち

峯雄

章治

章嘉

翔太

道を

輝翠

亮一

静香

月を

鶴城

延昭

まさ子

美枝子

俊晴

俱子

早都子

健司

泣き顔もやがては笑顔秋暑し
瀬を過り残暑へ戻る舟下り

柿の木塾 (浦和)

放下とは斯く閑かなり桐一葉

見透かざる心の揺らぎ一葉落つ

宵闇の机に夫の蔵書かな

桐一葉独りの部屋の一つの灯

宵闇に浮かぶ横顔笑み少し

桐一葉馬の手綱を長くして

宵闇が逃げ込む猫をかくまへり

肩に触るかすかな音や桐一葉

珊瑚の会 (浦和)

地図になき場所も吹きをり夕野分

沈む太陽常より大き野分後

傾ぎたる巣箱を戻す野分あと

キャンセルの旅程を追うて野分あと

掲示板の紙が剥れて野分かな

総立ちの野外ライブや雁来紅

野分後森に潮の香迷ひ来る

野分去り大海原の平らなり

野に残る草書のうねり野分後

空はみな音を吸ひ込み野分晴

手捏ねの杯で一杯野分あと

淑子

昇

和葉

水尾

かつ子

俊晴

恵子

節代

和子

史代

和子

広子

和葉

かつ子

喜恵

マスマ

水尾

昇

恵子

節代

めだか句会 (浦和)

靴投げて晴雨くもり秋高し

天高し機影光りて雲に入る

リハビリの右手くーば秋高し

空高し地球が背伸びしているよ

塩ゆでの枝豆の香や深呼吸

向かひ風みな受け止めて星月夜

空高し稜線望む小休止

秋高やはづむ心のペンダント

秋高しモダンな窓と田舎蕎麦

街角のピアノの調べ空高し

つくりたけ旨みの出汁は主役級

知つてゐる嫌いな筍の茸汁

毒茸を蹴りて樹林へ迷ひ入る

十三子

知子

はるみ

芳朗

敦幸

和子

八千代

忠夫

謙一

宏子

美智

月を

鶴城

令和5年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格 季音同人を除く同人・誌友

応募句 未発表作品：15句(表題を付す)

水明集・句会報等「水明誌」及び外部に発表した作品は不可。

締切 令和5年2月末日(発行所必着)

応募方法 水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員(9名)

山本鬼之介	網野月を	大村節代
石山かつ子	石井喜恵	井口俊晴
保坂翔太	青木鶴城	日高道を
曲淵徹雄		

新珠賞推選委員(5名)

宇田白鷺	大橋廸代	茂木和子
椎野美代子	波多野寿子	

新春俳句大会のご案内

【日 時】 令和5年1月30日(月) 12時 受付・投句
12時45分 開会予定

【会 場】 浦和コミュニティーセンター
(JR 浦和駅東口パルコ 10階)

【会 費】 1,000円

年当初の新春俳句大会です。日時をご確認の上、奮ってご参加ください。

※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。

兼題などの詳細は12月号、1月号に掲載いたします。

担当：事業部

令和5年度水明俳句会 指導者および幹事の会のご案内

【日 時】 令和5年1月30日(月) 10:00 (9:30受付)
約1時間半を予定

【会 場】 浦和コミュニティーセンター
(JR 浦和駅東口パルコ 10階)

万障お繰り合わせの上、ご出席ください。

※議案などの詳細は12月号、1月号に掲載します。

※欠席の場合は、総務部宛にご連絡をし、なお代理の出席をお願いします。

※当日は午後から「新春俳句大会」が開催されます。合わせてご出席ください。

令和4年11月

水明主宰 山本鬼之介
水明 常任幹事会

風 声

○現代俳句九月号——「現代俳句年鑑2022を読む」欄

小倉斑女氏の感銘十句抄に

ゆふがほを待つゆふがほの顔をして 永野史代

○現代俳句九月号——「現代俳句の風」欄

オンラインに身内の安堵雁渡る

文化の日平積みゴルゴサティーン 岡田宣子

笑栗や艶の三つ子がまるまると 近藤徹平

窓際のポトルシップや星流る 宮崎チアキ

○天塚（宮城昌代主宰）九月号——「珠玉一句」欄

夏帯や紅さす指の板につき 田寺玲子

○浮野（落合水尾主宰）九月号——「好日」欄

落合水尾主宰の巻頭言に山本鬼之介主宰の『マネキン』

より

くろがねの匂ふ水こそかな女の忌 鬼之介

作者は「水明」の第五代主宰。（父山本嵯迷、兄山本紫黄）

俳暦五十年。純粹無垢な、追悼句である。

花日和かな女観音日和かな 落合水尾

○くちら（中尾公彦主宰）九月号——「受贈俳誌美術館」欄

天井に唸る昭和の扇風機 鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）九月号——「受贈誌拝見」欄

佛燈に火蛾水争ひのありし村 鬼之介

○新月（松田碧霞主宰）九月号——「受贈俳誌紹介」欄

夏帯や紅さす指の板につき 鬼之介

○太陽（吉原文音主宰）九月号——「受贈誌御礼」欄

遠雷や反り美しき巫女の舞 鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）九月号——「他誌拝見」欄

夏帯や紅さす指の板につき 鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）九月号——「諸家近詠」欄

佛燈に火蛾水争ひのありし村 鬼之介

○山彦（河村正浩主宰）九月号——「諸家近詠」欄

遠州といへば「石松」冲膾 鬼之介

○苧（山本一步主宰）九月号——「受贈誌の一句」欄

禁漁の立札濡らす夏の雨 村杉清吉

○天塚（宮城昌代主宰）九月号——「新著紹介」欄

五明昇句集「旅信」の紹介

「水明」同人の『道草』につづく第三句集。

平成二十九年から令和三年までの三六二句を収録。埼玉

俳句連盟参与。昭和十九年長野県生まれ。

国内外の旅から得られた豊かな句材、確かな観察眼は

大景だけでなく、身の回りにも向けられており、的確な

季語の斡旋、俳諧味も感じる句集。

娑婆の風程よく通す秋簾

青嵐たてがみ立つる尾根の径

霊山へ片帆の揃ふ水芭蕉

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼

(敬称略)

— 令和四年九月三十日現在 —

鳥羽和風	20	丸山マスマ	1
山戸美子	3	西幅公子	2
森美枝子	2	松井由紀子	1
山口富子	3	大塚茂子	5
丸山マスマ	5	越田栄子	1
りんどう忌より		森川義子	1
山本鬼之介	5	矢作水尾	1
染谷正信	1	星野和葉	1
大場順子	2	柚木治子	5
保坂翔太	1	田中章嘉	1
日高道を	2	河野はるみ	1
石山かつ子	1	野田静香	2
石井喜恵	1	熊倉千重子	2
大村節代	1	梅澤輝翠	2
曲淵徹雄	1		
反町修	5		
		— 合計 79 口 —	

誤植訂正

十月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

○ 一二頁下段

正 落鮎や錆色きざす床柱

誤 落鮎や錆色きざす床柱

○ 表四裏表紙・四二頁下段

正 金魚下げ石塀小路を・行く舞妓

誤 金魚下げ石塀小路行く舞妓

○ 六二頁上段

正 敷石に刹那止まるや拵蝶

誤 敷石に刹那止まるや拵蝶

小・林・京・子
正・木・萬・蝶

お知らせ

水明発行所はこれまで平日の(月)・(水)・(金)の三日間開所しておりましたが、十一月より平日は(月)・(金)の毎日開所致します。開所時間は従来と同じ午後0時30分～4時30分です。

御用の方は、この時間に係がおりますのでご利用ください。
(土)・(日)・祝祭日及び水明の行事のある日は閉所致します。()

総務部

後記

秋晴れのある日、所用があつて銀座へ出掛けました。土曜日の午後とはいえ、どこかで祭りがあるのかと思う程の人出で、行き交う人は皆マスクをしています。その夜のテレビでコロナが治まつてきたので、国がマスク、手洗い、うがいの收拾を示唆したら、いやそれは自己判断だと論争しています。百年前のスペイン風邪では、五千万人から一億人以上の死者が出たといわれています。治まりそうになると、マスク、手洗い、うがいはそろそろ止めていいかという声があつたとか。百年前も今の状況と同じで、何とも進歩がないのには驚きます。スペイン風邪はパンデミック待ちで終了。新型コロナウイルスはワクチンが出来たのがかろうじての進歩で特效薬はまだ出来ません。

今年の一「りんどう忌」は四十人が集い修する事が出来ました。かな女先生に関しては、水明九月号八二頁に、鬼之介主宰の他誌転載の記事をお読み下さい。そして、かな女先生の句集「牟良佐伎」の序文は、何と吉屋信子です。その中に有名な久女とのやり取りが載っています。

——大正七、八年から十二、三年まで杉田久女がめざましくホトトギスの雑詠欄に進出した頃に、感情の起伏の烈しい久女は、虚子先生がかな女さんをごひいきだとひがんで、虚子嫌いかな女嫌いの単帯と一矢を放った。東京下町の明治の正しい躰を身につけた柔和なかな女さんが、それを柳に風とさらり受け流して、呪う人は好きな人なり紅芙蓉と応じて、さすがの久女も噛みつきようがなかつたと伝えられている。——わが先生は素晴らしいお人柄ですね。

今年もあと二か月。ころばぬよう、風邪をひかぬよう、コロナにならないようにと……お気をつけ

(節代)

今月のはてな？

- 纂(あつ)む
- 薯蕷汁(とろろじる)
- 暮夜(ぼや)
- 大水青(おおみずあお)
- 因(よす)が
- 蛙の傘(ひきのかさ)
- 金雀枝(えにしだ)
- 手斧(ちような)
- 鬼蜻蜓(おにやんま)
- 感(かま)ける

87 75 46 35 35 33 30 27 26 16 頁

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内にお願ひします。)

水明

令和四年十一月号

通巻一一〇六号

令和四年十一月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代

半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

発行人

山本 鬼之介

印刷所

中央美版

季音抄

山本鬼之介

詩の工夫生まるるまでの秋扇
「日本国憲法」爽秋の蔵書印
マダムと呼び止めらるるラ・フランス
二・三匹産着を揺らす赤蜻蛉
捨てられぬ夢一つ持ち登高す
昼網の秋鱧でんと魚の棚
おもひ草貝紫の夕暮来
正装の雄姿居並ぶ秋の山
ラ・フランス手首撓はせ貫ひけり
登高や松美しき島数ふ
石仏に泪の跡や雁渡し
岩肌は柱状節理秋の山
下手より端は鈴虫能舞台
金継ぎの猪口にほぼつき二つほど
啄木鳥や山深ければ山の音
星空に季語の飛び交ふ西鶴忌
来し方にふたつ悔いあり曼珠沙華
枕木の間無邪気に秋の草

五明昇
境延昭
椎野美代子
島津初花
鈴木康世
田寺玲子
梅澤佐江
池田雅夫
松井由紀子
大場順子
正木萬蝶
井上玲子
河野はるみ
石田慶子
日高道を
野田静香
青木鶴城
近藤徹平

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆▼

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

抜け道は昭和の団地蟬時雨
 武蔵餅の機織の音も秋の声
 赤蜻蛉しやくり泣く子の背に夕日
 文弱な人は嫌ひよ単帯
 緑蔭を出でて歩速のよみがへる
 天の川妹漕ぐや瑠璃の舟
 秋日和犬は曾孫の好敵手
 暁闇の天地をつなぐ稲光
 添書に「是非」の二文字秋めけり
 手花火や闇に父母あるやうな
 畦豆や知名度高き里土産
 川釣りの月の天竜涼新た
 島唄が心に染むる秋の夜
 万緑を抜くれば広し海と空
 筋通す勇気をカンナから貫ひ
 法師蟬ひと鳴きごとに遠のけり
 妻ひとり炎天の中帰りゆく
 こつそりと小唄師匠の墓洗ふ

阿部幸代
 梅澤輝翠
 渋谷きいち
 染谷正信
 横山君夫
 杉浦理恵
 清水桂子
 反町修
 菅原卓郎
 越田栄子
 菅原真理
 西幅公子
 丸屋詠子
 山岸久美子
 篠崎紀子
 岡田宣子
 元田亮一
 新曆文

水明例会案内	句会名	日時	会場	指導者	幹事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂境 木和子 延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	青木 鶴城 太田 絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明 昇 曲淵 徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境延 昭 石井 喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐江 河野 はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬蝶 石田 慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本 早苗

水 明

令和四年十一月一日発行 毎月一日発行

(第九十五卷 第十一号)

定価 一〇〇〇円